ISSN 2186-7259

ZENBI

全国美術館会議機関誌

September 2021［Vol.20］

Sept. 2019

Vol.20

Optec Spotlight

ERCO Optecは、美術館·博物館の照明に必要な機能と品質を全て持ち、さまざまな展示様式にも柔軟に対応することができるLEDを光源としたスポットライトです。
ERCO 独自開発·製造の最新型光学レンズシステムにより、作品のみをアクセント照明するスポット配光から、壁面を均一に照射するウォールウォッシャ配光、8m超の高天井の空間にも対応する高出力タイプまで幅広く品揃えされており、鑑賞者だけでなく運営者もストレスなく最高の光環境を構築できます。

ERCOでは長年にわたり培ってきた世界中の展示空間における経験をいかして、製品だけではなく、最適な照明ソリューションの提案をいたします。

ERCO

ライトアンドリヒト株式会社　〒105-0014 東京都港区芝2-5-10 TEL:03-5418-8230 / FAX: 03-5418-8238
※平成27年1月より社名変更いたしております（旧社名：エルコライティング株式会社）。

Contents

ブロック報告

2 ［北海道］「現実の空間」の体験　久米淳之
4 ［東　北］「いま」に収蔵品を提示すること　鈴木 京
6 ［関　東］「美連協」後の展覧会を考える―コロナ禍を乗り越えるために　井関 悠
8 ［東　京］3度目の緊急事態宣言を受けて　島本英明
10 ［北信越］ささやかな会場造作の変化　家から風のイメージへ　野田訓生
12 ［東　海］コロナ禍をチャンスとした館内人材の多様化を望む　村上 敬
14 ［近　畿］関西は展覧会が元気だ。　越智裕二郎
16 ［中　国］2020年の雪舟顕彰　荏開津通彦
18 ［四　国］コロナ禍、続く模索と展開―展覧会とオンラインコンテンツ　長井 健
20 ［九　州］コロナ禍のミュージアム 宗像晋作

新規正会員紹介

22 安田侃彫刻美術館アルテピアッツァ美唄
23 栃木市立美術館
24 角川武蔵野ミュージアム
25 シルク博物館
26 東京オペラシティ アートギャラリー
27 ヨックモックミュージアム
28 サイトウミュージアム準備室
29 京都府京都文化博物館

ZENBI［vol.11-20］総目次　30
賛助会員各社　34
事務局から　35
編集後記　37
投稿要領　38
ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定　38

ISSN 2186-7259

ZENBI　全国美術館会議機関誌　Vol.20　2021年9月1日発行 ©（一社）全国美術館会議
［編集］（一社）全国美術館会議広報委員会
［発行者］（一社）全国美術館会議　〒102-0082　東京都千代田区一番町6-3-103　TEL 03-6272-8555
［デザイン］宮谷一款　［印刷］日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社　〒604-8551　京都市中京区壬生花井町3

北海道ブロック

「現実の空間」の体験

久米淳之（くめ あつし・北海道立近代美術館）

2020年7月に中止が決定となった札幌国際芸術祭。2014年、2017年に次いで3回目の今回は、全12会場に国内外73組のアーティストが参加する予定だった。芸術祭は初回から「都市と自然」が大テーマにあり、札幌は「自然と共生する現代的なコミュニティのあり方を志向するのに最適な場」（ディレクターチームにより公表されたコンセプト）であるとし、大都市でありながら厳しい自然の猛威と向き合う冬の季節こそ、札幌の特徴と魅力を活かすと考えられることから、本会期を冬の2020年12月19日から2021年2月14日までの時期に予定していた。2020年2月に開催延期を発表した「さいたま国際芸術祭」、「房総里山芸術祭」や、4月に中止決定した「ひろしまトリエンナーレ2020」など、国内外の芸術祭の延期や中止が発表されていくなかで、事務局とディレクターチームの議論を重ねた結果の中止である。

中止決定後、企画メンバーと参加予定であった全アーティストの同意のもと、企画内容を公式に公開する「札幌国際芸術祭2020特別編」の実施が決まり、本会期にあわせ、実に多彩なプログラムが「できる限りの方法」で展開された。「SIAF TV」と称した、アーティストやディレクターたちのトークなど、10日間におよぶYouTube上での番組配信や、ウェブサイトでの作品鑑賞コンテンツ、そして会場となる予定だった札幌文化芸術交流センターSCARTSでのドキュメント展示。会期終了後刊行された札幌国際芸術祭記録集『SIAF2020インデックス』は、出品予定だった作品図版も豊富に掲載され、270ページ1,500円という破格値の充実したカタログである。ドキュメント展示やYouTube、カタログを一通り観ると、作品やアーティストたちが詳細に紹介されればされるほど、この眼で観てみたかった、体験したかったという想いがこみ上げてくる。それほどに、この芸術祭に携わったスタッフの熱い想いが感じられた展開であった。

芸術祭特別編と並び評判を呼んだのは、急遽芸術祭の代替企画として開催された「札幌ミュージアム・アート・フェア 2020-2021」（2020年12月19日〜2月14日）である。会場の一つとなる予定であった札幌芸術の森美術館と、本郷新記念札幌彫刻美術館での同時開催とし、道内14のギャラリーが参加、両会場あわせて83名の画家、彫刻家、造形作家らの作品およそ600点が出品された。北海道のギャラリーは札幌に集中しているが、遠方では釧路からの参加など、札幌でも普段あまり見られない作家もいて、美術関係者間の話題となっていた。

フェアの企画者である札幌芸術の森美術館の佐藤友哉館長は、最初の芸術祭開催の頃から、北海道の作家を支援する方法を模索していたという。個展を自身で開きつつ発信に奮闘する北海道の美術家を、何とか支援し、道外にも送り出せるように、北海道のアート・マーケットを活性化させたいという想いが、芸術祭中止を機に実現されたものといえる。およそ2ヶ月の会期で2館に5,029人の観覧があり、648万円の売上につながったという。公立美術館での商行為については批判もあったというが、このフェアはコロナ禍における北海道の美術界の停滞への復興支援という、いわば非営利の事業であり、会場は企画趣旨に述べられていたとおり、作品販売にとどまるものではなく、北海道美術の現在を見渡すことができ、これからの展開の希望を見いだせる空間だった。これを機に、北海道の美術がより広く国内外に発信され、躍動していくことを願うばかりだ。

特別編となった芸術祭と、会場補填で開催されたアート・フェアは、そもそも相関関係にあるといってよいが、続けてこの二つの会場を観ると、それはそれぞれバーチャル映像と実作品に対峙する、対照的な鑑賞体験となった。出品作品、あるいはその構想などを映像で観ることは、もちろん想像もひろがり、楽しい体験である。ただそれ以上に実際の空間にある作品の存在感は、いつもより強く印象に残ったことも事実であった。「三次元は現実空間であり、実際の空間は平坦な表面上の絵具より、本質的に力強く明確である」という、ドナルド・ジャッドの言葉が思い起こされた。

そういった意味では、中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館で開催された「中原悌二郎賞創設50周年特別展」（1月5日〜2月28日、3月3日〜5月9日）では、彫刻作品が具象、抽象表現に分けられて整然と並ぶなかで、受賞作品という風格を携えたどの作品からもインパクトを受け、重厚な展示空間の体験であった。日本の彫刻界の進展を牽引してきたといってよい中原悌二郎賞の受賞作品によって、現代に至る日本の彫刻表現を概観でき、またその作品の多様性から、あらためて彫刻表現の可能性と魅力を感得できる、重要な展覧会と感じた。

十二分に展覧会を巡ることもできず、また美術について発信も鑑賞も、そして人との対話でさえ、急速にオンライン展開に取りかからざるを得なくなった状況のなかで、それでも足を運ぶことのできたいくつかの展覧会で、身にしみて感じられた「現実の空間」の力強さ。やはり私たちは、モノに向き合い、扱って、見せることを生業としているのだということを、心の奥のほうで感じ入った、春のはじめであった。

中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館
「中原悌二郎賞創設50周年特別展」会場風景

札幌芸術の森美術館　「札幌ミュージアム・アート・フェア 2020-2021」
会場風景

東北ブロック

「いま」に収蔵品を提示すること

鈴木 京（すずき きょう・秋田県立近代美術館）

下半期（2020年10月～2021年4月）の東北地域は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に加え、大雪による雪害、M7規模の地震にも見舞われた。筆者自身はあまり他館に足を運ぶことができなかったため、今回は当館の状況を中心に、オンラインで収集した情報を報告したい。

今期、当館で最も規模の大きかった展覧会は「ARTS & ROUTES - あわいをたどる旅 -」展（2020年11月28日～3月7日）で、秋田公立美術大学で教鞭をとる服部浩之氏（インディペンデントキュレーター・同大学大学院准教授）企画監修のもと、同大学とNPO法人アーツセンターあきたの協力を得て開催した。江戸後期に秋田藩に滞在した本草学者・菅江真澄を「滞在制作」の人ととらえて展示の軸にしており、同大学の教授陣、招待作家の作品のほか、地域とともに創造を続けてきたプロジェクトの成果が展示された。本展示にいたるまでには学生のゼミと研究会が重ねられ、その足跡は展覧会広報誌「JOURNAL」各号にまとめられている。歴史上の人物を多面的に切り分け現代アート展に再構築する展示は当館では新しい試みで、地域に美術大学が存在することの豊かさを感じた次第である。課題として残ったのは、展示の開催意義を予算獲得に結び付ける難しさ、そして現代アートの展示と鑑賞者との橋渡しの難しさだったように思う。後者については、説明を尽くすことがよいこととは思わないが、補助の試みはもう少し必要だったと実感している。今後、他館の普及活動の実践を参考にしていきたい。

さて、先述の展示では、秋田に滞在し事物を記録した真澄、という観点から土地ゆかりの収蔵品も展示された。展示当初は視覚の整理が難しかったが、今振り返ってみると、いろいろな資料と合わせて眺めることで収蔵品の新たな一面に気づき、全く独立した要素・作品同士が図らずも結び付く面白さが感じられたように思う。それはとりもなおさず、収蔵品に新たな価値や視覚が付加されたということでもある。

筆者が学生だったころ（となるとだいぶ昔だが）と比べると、各館が常設展示、収蔵品の提示方法に工夫を重ねるようになっていると感じられ、同様の傾向はZENBIバックナンバーをみても確からしいとうかがえる。筆者自身もテーマをもって常設展を担当してきたつもりだが、目新しいテーマ、収蔵品の見せ方となるとなかなか難しい。説明にしても、つい当時の状況や技法ばかりに終始してしまい、結果、現代から断絶された位置にある、古びたものとして収蔵品を見せてしまっている気がする。上記の展示において現代アートと収蔵品が併陳される様子には、こうした反省とともに、「いま」にどのように収蔵品を提示していくかということを、改めて考えさせられた。開館から年を重ねるほど、特に常設展示においては、同じ収蔵品が繰り返し展示されてゆくことになる。訪れるたびに、来館者が新鮮な楽しさを得られるような瑞々しい収蔵品の見せ方は、今後一層望まれてゆくことだろう。

最後に、簡単にではあるが、今期の東北ブロックにおける収蔵品展、地域ゆかりの作家の作品展を振り返ってみたい。秋田県内では、当館の二つの特別展（「大野源二郎写真展」（2020年10月16日～2月7日）、「響きあう個性―福田豊四郎とゆかりの日本画家たち―」（3月13日～4月18日）、どちらも収蔵品展）のほか、秋田市立千秋美術館にて、秋田で活動した洋画家・馬場彬の画業を俯瞰する「没後20年馬場彬展」（1月9日～2月23日）が開催。収蔵品に加え、アトリエ調査により見いだされた多数の作品が紹介されていた。岩手県立美術館では、地元で写真館を営み芸術写真を撮影し続けた写真家・唐武を取り上げた初の本格的回顧展「唐武と芸術写真の時代」（1月16日～2月14日）を開催。青森県立美術館では青森市出身の油彩画家・阿部合成を、所蔵品を中心に県外所蔵の代表作なども交えて再考した「生誕110周年記念 阿部合成展 修羅をこえて～「愛」の画家」（2020年11月28日～1月31日）が行われていた。さらに阿部展と同時開催の「コレクション展2020-4：危機の中の芸術家たち」（2020年11月28日～2月23日）はコロナ禍を含めた2020年の情勢に対応して収蔵品を展開していたことから、ぜひ伺ってみたかったところである。山形美術館では収蔵品と県内で活動する現代美術家の作品をともに展示し、美術の地域性を探る意欲的な展示「山形　美の鉱脈―明治から令和へ」（2020年12月10日～1月31日）が開催されていた。

上記のように他館の企画を調べながら、今期足を運べなかったことを残念に思う。独自の収集方針を反映した各館の収蔵品は、設立者・自治体のかけがえのない財産である。それぞれに恵まれた収蔵品を、現代の社会にどのように提示してゆくのか、他館に足を運んで学ぶとともに自身も展覧会を作るようにしたい。

秋田県立近代美術館「ARTS & ROUTES - あわいをたどる旅 -」展示風景
鳥海山を描いた作品と真澄像

秋田県立近代美術館「ARTS & ROUTES - あわいをたどる旅 -」展示風景
岩井成昭作品と収蔵品があわせて展示される室内　撮影：草彅裕

関東ブロック

「美連協」後の展覧会を考える
―コロナ禍を乗り越えるために

井関 悠（いせき ゆう・水戸芸術館現代美術ギャラリー）

前号においては、ほぼ新型コロナウイルス感染症に関する寄稿一色となった本誌であったが、同感染症の国内流行から1年を経てもなお収束の気配はなく、むしろ変異株の出現によって深刻な事態へと向かっているかのように見える。一方では国内でも2月17日から医療従事者を対象に、4月12日からは高齢者を対象としたワクチン接種が始まっており、イスラエル、イギリス、アメリカなど接種先行国の結果を見るかぎり、その効果に期待せざるを得ない。

さて、昨年は多分に漏れず当館も感染症対策と臨時休館に振り回された1年であったが、それに加えて今年度は、昨年度から続き入場者収入や物販売上の減少、自治体の税収減や感染症対策による予算削減、企業協賛の廃止や縮小など、費用面での厳しさが際立っている。また、海外からのアーティストや関係者の招聘、作品輸送についても依然として儘ならず、展覧会企画に大きな影響をおよぼし続けている。

4月15日、株式会社読売新聞東京本社と美術館連絡協議会事務局より、加盟館宛てに「展覧会の事務局業務停止について（2022年度〜）」と題するファックスが届いた。美術館連絡協議会（以下、美連協）は、国内公立美術館の多くが加盟している全国的な組織として1982年に発足、現在は149館が加盟している。その役割の柱はいうまでもなく「展覧会の共同開催・巡回」であり、美連協事務局が、実質的な各巡回展の運営事務局を担ってきた。また多くの加盟館にとっても、展覧会の共同開催と巡回が加盟の主たる目的となっていることだろう。当館は2016年に加盟し、2018年度の「霧の抵抗　中谷芙二子」で巡回を提案（巡回実現せず）、2019年度の「大竹伸朗　ビル景1978-2019」（熊本市現代美術館との企画）にて美連協と協業しており、今後の企画についても美連協との協業も考えられた。

今回の通知には「2022年度以降、美連協事務局における展覧会の事務業務を停止」するため、「2022年4月以降は、共通経費を取りまとめる業務を引き受けることができなくなった」とある。また、「2022年度以降の開催に際しては、各館の自主的な運営」となるとのことで、巡回展の実現においてもっとも重要なタスクの一つである「共通経費をとりまとめる業務」が宙に浮くことになる。

4月21日の美術手帖webで配信された記事「美術館連絡協議会が事務局業務の停止を発表。コロナで活動見直しへ」※にあるように、「公立美術館は館によって予算の執行方法が様々」であり、美連協はその取りまとめを担ってきた。美連協を介さず、また展覧会企画会社や新聞社、テレビ局なども挟まずに巡回展を実施するとなると、その業務の大半は自ずと学芸員が担うことになり、展覧会企画に支障を来す可能性もある。特に在籍する学芸員の少ない地方館などにとっては多大な影響となることも考えられよう。

美連協は各加盟館に対し、翌16日にも「展覧会の事務局業務停止について（補足説明）」と題した通知を送付している。そこには、以前より加盟館の増加に伴い事務局体制の見直しを検討していたことに加え、新型コロナウイルスの感染拡大で美術界全体が痛手を受けるなか、これまで公立館に限っていた美連協の活動を、今後においては「公立・私立の別なく美術館を支援する」ために業務内容や組織体制を見直すとある。確かに、公共性の高い美術館である限り、公・私によって支援を分ける理由はない。そうであれば加盟条件を緩和し、私立美術館も加盟を認めていくという方法もあったのではないだろうか。

美連協は、今後の組織の姿についてはまだ公表できない段階にあるとしている。これまで読売新聞がメセナ的な活動として美連協を組織し、日本の美術館運営に多大な貢献をしてきたことに違いはないが、一方で美連協が担ってきた「展覧会の共同開催・巡回」を、一企業の芸術文化支援に頼っていくことにも無理があったのかもしれない。もちろん、展覧会企画会社や他の新聞社・テレビ局などの協業により展覧会の共同開催や巡回展を取りまとめることもできるが、集客・収益性の観点から企画によっては実現が難しくなる可能性もある。

いずれにせよ、美連協が展覧会の事務局業務を停止するのであれば、今後の展覧会の共同開催や巡回の仕組みについて、改めて検討する必要があるだろう。コロナによる経済的影響が次年度以降も続く可能性は十分にあり、また先行きも不透明であるからこそ、美術館同士の繋がりをより密に、活発にすることによって乗り越えていくことがいま求められるのではないだろうか。そのために、美連協と並び多くの美術館が加盟する、もう一つの全国的組織である全国美術館会議というプラットフォームの上であれば、この議論を進めていくことができると考えている。そこでは、展覧会共同開催や巡回にかかる事務業務を担う機関の設立、共同研究やコレクションの貸借といったこれまで行われてきたものだけでなく、展示什器や映像・音響機器類、また各学芸員の持つ専門性の“シェア”の可能性についてなど、企画内容の充実やコスト削減についての協業などについても模索してもよいのではないだろうか。

※「美術館連絡協議会が事務局業務の停止を発表。コロナで活動見直しへ」美術手帖、2021.4.21
https://bijutsutecho.com/magazine/news/headline/23907

東京ブロック

3度目の緊急事態宣言を受けて

島本英明（しまもと ひであき・石橋財団アーティゾン美術館）

新年度に入って、東京都の新規感染者数の増加傾向が顕著となり、4月23日、前回の宣言解除から1ヶ月余りで、3回目となる緊急事態宣言が発令された。それを受けた東京都の緊急事態措置等では、2回目の宣言時（1月8日～3月21日）と異なってより広範かつ踏み込んだ内容が示され、「博物館等」についても、1,000㎡超の施設は休業要請、以下の施設は休業の協力依頼の対象となり、4月25日から5月11日までと設定された宣言期間に沿って、各館は順次、臨時休館に入った。これにより、国立新美術館の「佐藤可士和展」（2月3日～5月10日）、東京都写真美術館の「澤田知子　狐の嫁入り」（3月2日～5月9日）、東京富士美術館の「絵画のドレス｜ドレスの絵画」（2月13日～5月9日、いずれも当初会期）などは、会期途中の4月24日をもって閉幕となった。他にも、5月中旬から下旬にかけての閉幕を予定している展覧会は少なくなく、宣言が延長されたため、さらに対応を迫られることになった。

2回目の宣言と何が決定を分けたのかといえば、この春を通じて由来の様々な変異株のリスクが増大したことは確かで、その対策として「人流の抑制を最優先に」、「生活や健康の維持のために必要な場合を除き」、社会の諸活動におしなべて制約がかけられたということだろう。東京都では昨年6月以降、およそ10ヶ月間、基本的には開館を継続できていたことを考えると、再度、一斉休館に追い込まれる事態には唐突の感を否めないが、直近の半年間を振り返るこの場では、昨年から各館の積み上げてきた運営上の知見や工夫が定着し、今春に至るまで展覧会活動が社会において着実に営まれたことをポジティブに受けとめ、その概況を記したい。

俯瞰してうかがえるのは、いわゆるブロックバスター展の不在により、展覧会の多様性が際立ってきたということ、つまり、国外からの借用企画が目立った状況からのリバランスが自然な形で図られたということではないか。2020年10月以降に開幕した西洋近現代美術の主に国外借用に基づく展覧会としては、「ロンドン・ナショナル・ポートレートギャラリー所蔵 KING&QUEEN展―名画で読み解く英国王室物語―」（上野の森美術館、2020年10月10日～1月11日）、「テート美術館所蔵 コンスタブル展」（三菱一号館美術館、2月20日～5月30日　以下、いずれも当初会期）、「生誕150年記念 モンドリアン展　純粋な絵画を求めて」（SOMPO美術館、3月23日～6月6日）、「イサム・ノグチ 発見の道」展（東京都美術館、4月24日～8月29日）などに限られており、現況にあって貴重な鑑賞機会を提供することになったのは紛れもないが、国立新美術館で3月より開催予定だった「カラヴァッジョ《キリストの埋葬》展」が開催中止に追い込まれたように、国外からの作品輸送に伴うハードルは依然として高く、都度の状況に左右される状況にある。筆者の勤務する石橋財団アーティゾン美術館でも、5月から開催予定だった「クロード・モネ　風景への問いかけ」展の開催を10月に延期する措置を余儀なくされた。

他方で、日本の近現代の各領域においての歴史的な総括や、個別作家の再考、発掘の試みが相次いでみられたことは、この期間の美術シーンに持続的な熱を生み出すとともに、各館のポテンシャルが顕示される機会になったように思う。私見ながら代表的な例に言及するならば、写真の領域では「日本初期写真史　関東編　幕末明治を撮る」（東京都写真美術館、2020年12月1日～1月24日）の堅実な学術性に裏づけられた充実した展観、近代美術の領域では、「前田利為　春雨に真珠を見た人－前田家の近代美術コレクション－」（目黒区美術館、2月13日～3月21日）、「電線絵画展 小林清親から山口晃まで」（練馬区立美術館、2月28日～4月18日）、「さまよえる絵筆―東京・京都　戦時下の前衛画家たち」（板橋区立美術館、3月27日～5月23日）の視点や問題の提起は、とりわけ印象的であった。いずれもコロナ禍対応に迫られて準備できる内容ではなく、各館の志向する方向性やコレクションに確かに根ざした、たゆまぬ研究、考察の賜物であったと思う。継続性という観点で言うと、アーティゾン美術館で開催中の「STEPS AHEAD: Recent Acquisitons 新収蔵作品展示」（2月13日～9月5日に会期延長）もまた、2015年のブリヂストン美術館休館以来の作品収集活動の成果を示そうとするものであることを、僭越ながら申し述べておきたい。

現代に属する領域では、東京都現代美術館の「石岡瑛子　血が、汗が、涙がデザインできるか」（2020年11月14日～2月14日）に触れないわけにはいかない。石岡の迫力に満ちた仕事の数々はその厳格なパーソナリティーと一体となって強いインパクトを放ち、会期終盤には観衆が長蛇の列をなした。強靭なるものへの憧れはいかなる世でも普遍であろうが、今ほど求められている時代もないのではないかとの感を強く覚えた。このコロナ禍の世が美術展をめぐって明確な反応を示した事例の一つといえるのではないか。

開館が常態ではなくなってから1年余を経て、オンライン・コンテンツの充実により、展覧会は受け手との接点を多層化させ、その枠組みを変容させつつある。その変容の中で、実際に会場に足を運ぶことの意味もあらためて規定されていくであろう。行列の多寡にかかわらず、その行方に目を凝らしたい。

石橋財団アーティゾン美術館「STEPS AHEAD」展 会場風景

北信越ブロック

ささやかな会場造作の変化
家から風のイメージへ

野田訓生（のだ くにお・福井県立美術館）

本欄の趣旨に反し、当館の話題に終始することをご容赦いただきたい。

2020年10月9日から11月8日の会期にて開催された「テレビアニメーション創成期から現在までの50年―エイケン制作アニメーションの世界―」展が、コロナ禍のなか当館で開催される最初の特別展となった。地元テレビ局との実行委員会形式で開催可能な、ある程度の集客が見込める事業として、コロナ禍など思いもよらぬ前年度の予算作成時に開催を決定したものである。夏休みの実施が順当な内容だが、当初の東京オリンピック・パラリンピック大会の時期を避け秋季開催とした経緯があったが誤算となった。想定外は続き、予定していた大都市圏の百貨店3会場が中止となり、当館が初会場となった。実行委員会での協議の末、幸い開催が了承されたが、当初の想定とは全く異なる状況下で一から展覧会を見直すこととなった。とはいえ、内容自体を大きく変更することも現実的ではない。そこで導入されたのが、会場入口部分の造作デザインの変更であった。

手指の消毒を済ませ美術館に足を踏み入れると、鉄人28号の等身大フィギュアの向こうから大きな白い三角のイメージが目に飛び込む。横長の長方形の上辺が三角となった形。それは誰にも了解される「家」「ホーム」のシンボルである。矩形に穿たれた小さな四角形は容易に「窓」として認識され、「家」のイメージは完全となる。壁面には、窓が開口された小さな家の形が多数並べられて、裏から照明を当てられることで、窓に灯りがともる夜の家々の群れを出現させる。

展示の中心であるサザエさんが「家庭」や「家」を強く連想させることに加え、エイトマンや宇宙少年ソランなど昭和30年代の懐かしのTVアニメたちは、家族の団らんに欠かせぬものとして、「家」の記憶に強固に結びつく。ステイホームが叫ばれてきた時局にあって、こうした幸せと癒しのメッセージをともなった「家」「ホーム」なるイメージの提示は、来館されたお客様と展示をつなぐ有用なフレームとなったと信じたい。

2021年2月27日から3月21日という異例の短会期で開催となった特別展「ランス美術館コレクション 風景画のはじまり 〜コローから印象派へ〜」は、当初2020年4月から5月にかけて開催が決定していたが、海外輸送が不可能となって中止を余儀なくされた。いまだ県立文化施設の全体方針が定まらぬ中、前売券の発売開始日であった4月1日にいち早く中止を公表した。2年で7会場を回る計画の西洋絵画の巡回展であったが、初会場であった当館と次会場には空輸が間に合わず、夏季の3会場目からようやく開幕の運びとなった。これを受け、諸事情から当館は同年度内の開催となった。メインの展示室も県民に貸出していることから、新たな会期の設定に苦慮することとなる。多くの団体への説明と了承、代替時期の調整が不可欠であった。卒業制作展など心情的にも時期の変更が困難な案件もあり、結果として、23日間という短期の展覧会として集客条件の悪い冬季での開催となった。

同種の展覧会がそうであったようにクーリエがいない異例の海外展である。作品保全を担保するため国内の修復専門家が起用されスムーズに搬入展示作業が進行したが、会場造作には予想外の負担が必要となった。仮設壁面には当館ではこれまで経験したことのないような入念な補強が指示されたのである。館の構造上の問題とピクチャーレールを用いたワイヤー吊りを避けたためだとはいえ、見た目には全く表れない壁の裏側に造作作業の時間と経費を圧迫されることとなった。肝心なのは来館されるお客様の目に見える部分の会場演出である。おおげさだが、そのコンセプトは「美術館内に（印象派の）光と風を呼び込む」である。

美術館に足を踏み入れると、巨大なバナーイメージが眼前に現れる。展示絵画の拡大イメージが空間と一体化したような効果をかもすのは、吟味された透過素材に印刷された透ける画像であることと、外光をもたらすガラスに貼られた様々な色の特殊シートが作り出す光線の効果であろう。晴れた日の正午を挟む数時間、特殊シートは床面に虹色めいた光の道を生み出す。ランス美術館が展覧会につけた原題は「印象派への道」であった。透過する大型イメージは展示室内にも採用され、壁を立てる代わりに各章をやわらかに区切ると同時に、実作品と融合しつつ各章のイメージ案内ともなる。経費節減の意味もあったが、なにより壁面による圧迫感閉塞感を排除することが目指された。壁色は通常より一段明るいものが選ばれ、壁面の一部には「窓」が設えられた。展示室を外へと開くと同時に、ステイホームの室内をも思わせる二重の象徴となっていたのかもしれない。

パッケージ展の包みを変えるだけの対症療法の報告に過ぎないが、是非を含め参考材料となれば幸いである。題に「ささやかな」と記したのは、通常とさほど違わないという意であるとともに、未曽有の状況への意識からであろう。事態の好転を願っている。

福井県立美術館「テレビアニメーション創成期から現在までの50年―エイケン制作アニメーションの世界―」展 入口デザイン

福井県立美術館「ランス美術館コレクション 風景画のはじまり〜コローから印象派へ〜」展 入口バナーデザイン

東海ブロック

コロナ禍をチャンスとした館内人材の多様化を望む

村上 敬（むらかみ たかし・静岡県立美術館）

現在、日本の美術館界は新型コロナウイルス感染症対策を中心に動いている。筆者もまた罹患への不安を覚えつつ、職場と自宅との間をひたすら往復している。

通勤以外の移動が著しく制限されている今だから…というのはいささか言い訳めくが、この災厄の年、東海ブロックの一美術館で1本の担当展を抱えた体験を記録してブロック報告に代えようと思う。結局のところ、のちのち役に立つのはそういった具体的な情報であろうから。

2020年度、筆者は所属館において共同企画展「富野由悠季の世界」（以下、本展）を担当していた。本展は地方公立美術館6館の共同企画による巡回展であり、2019年度から20年度の2年間で参加館を巡回する計画の下、2019年6月に福岡会場で華々しく開幕した。その後、兵庫、島根、青森、富山の順に各地をめぐり、2020年11月の静岡会場閉幕をもって終了というのが当初の予定であった。

感染者数が比較的少ない地域を巡回していた本展は、2020年2月末の国立博物館臨時休館を横目にしつつ、3月23日の島根会場閉幕までスケジュールを堅持していた。しかし、3月26日、青森会場が会期順延を検討し始めたとの一報が企画チームにもたらされる。5月中旬には富山会場も同様の検討を開始。結局巡回後半の3会場は順番を入れ替えつつ会期順延、第4会場・静岡、第5会場・富山、最終会場・青森へと開催順が変更された。

さて、筆者の属する静岡会場の会期は幸いにしていわゆる第2波と第3波の谷間の時期である2020年9月～11月にあたっていたため予定どおりの会期で開催できた。だが、展示作業の時期には県境を越えての人の移動は困難な状況となっており、共催館の学芸員に展示ヘルプを仰ぐことがほぼできなくなってしまった。当初の巡回作業案では、紙もの資料の陳列補助などで彼らの力を前提としていた。開催館担当者としては、その穴を埋めるべく、展示作業員の増員や展示日程の前倒しを願い出たのだが、これは事務局社のコスト判断により実現しなかった。現場作業員の奮闘によって事故なく開幕に漕ぎつけられたことこそ不幸中の幸いであったが、早朝から深夜に及ぶ展示作業が内覧会数十分前まで続くという、まさに薄氷を踏む体験を強いられた。

現在の美術館では巡回展の収益に期待する面が強く、限られた日程と予算の中、1日でも長く開場し収入を得ることがよしとされている。むろん、公開性の確保は美術館の本旨である。だが、華やかに見える展覧会の裏に予算と時間のバッファがない背水の陣を敷かざるをえない状況があり、そのリスクは現場の作業員が一身に担っているという構造の脆さを痛感した。

以上が本展巡回の流れであるが、今回のコロナ禍にかかる対応のうち、巡回共通のものを一つ、静岡会場独自のものを一つ紹介したい。

まず本展全体での取り組みとして、ウェブ企画「週刊トミノ展」を実施した。これは、青森・富山両会場の会期が順延されて巡回に約半年の空隙ができたことへの対策である。会期の谷間にあっても本展の存在をアピールし、見込客の興味をつなぎ止めるため、2020年5月29日から9月18日の毎金曜日、コラムやインタビューを継続発信した。既開催会場の学芸員による振り返り、開催予定会場の御当地紹介や展示予告、関係者コメント、会場限定プラモデルの製作ドキュメントといった記事を共通ウェブサイトに掲載し、SNSでシェアした。

静岡会場での実践としては対談配信を挙げることができる。もともと静岡会場で予定されていた富野監督と藤津亮太氏（アニメ評論家）の記念対談を講堂での対面開催から配信形式へと切り替えたのである。感染症対策の観点から、監督の地元であるサンライズ社において最小限のスタッフで対談を収録、その映像をライブ感をそこなわぬようなるべく手を加えずに編集、YouTubeにアップし、本展及び静岡県立美術館のサイトからリンクした。

これらはいずれもささやかなものではあったが、ウェブ発信の経験が乏しかった当館においては、新たな試みとなった。実際に蓋を開けてみれば、対談動画の再生回数が講堂定員の約50倍に相当する1万2千回以上を数えるなど、感染症対策を超えた新たな意義を見いだすことができた。一方、これら事業の実現過程において、デジタル編集・配信のテクニカルスタッフや映像・ウェブのデザイナー、広報専任スタッフといった人材の必要性が改めて浮き彫りとなった。

ここ数年、デジタルアーカイブ構築の補助金の話をよく耳にする。コロナ禍における情報発信にも効果的な施策といえよう。ただ、（コンテンツの立案は学芸員が担えるとしても）デリバリーにおいては現状の公立美術館のスタッフ編成では無理がある。どうしても、デザイナー、ウェブ技術者、専任広報担当者といった人材の確保が必要となる。このコロナ禍を奇貨として、多様な人材にあふれた美術館作りが全国で進むことを望みたい。

静岡県立美術館「富野由悠季の世界」展チラシ

静岡県立美術館「富野由悠季の世界」展会場入口。密集回避のため導線分離などが行われた。

近畿ブロック

関西は展覧会が元気だ。

越智裕二郎（おち ゆうじろう・西宮市大谷記念美術館）

コロナ禍による外出自粛が収まらない。2021年4月25日、第3回目の緊急事態宣言発出により関西3府県のほとんどの美術館・博物館が4月25日から5月11日まで閉館することになった。したがって4月24日が展覧会最終日になってしまった館もあり、美術館スタッフには痛恨事であったろう。筆者も自粛の中、十分見たわけではないが管見に入ったものを中心に紹介する。

京都国立近代美術館で開催された「分離派建築会100年　建築は芸術か？」(1月6日〜3月7日)は東京に次いで2会場目であるものの、会場の差異から京都展は格段にスケールが大きなものになったのではあるまいか？画像、写真、資料がいたるところに埋め込まれ、剥き出しの仮設壁が林立する会場を観客は彷徨うのだが、近年関西で相次いでいた「バウハウス」関連展を想起させ、記憶に残る展覧会であった。

向いの京都市京セラ美術館では「平成美術：うたかたと瓦礫（デブリ）1989-2019」（1月23日〜4月11日）が椹木野衣氏の企画・監修で開催され、資本主義経済の繁栄の一方で、日本に内在する巨大災害、その中での美術動向を椹木氏の視点で作品選定と展示がなされ、問題提起の展覧会であった。

一方で大阪市立東洋陶磁美術館では「黒田泰蔵」展（2020年11月21日〜7月25日）が静かに開催。同館の3階と2階の計2室の展示だが、屹立する白磁の造形は鋭く且つ存在感があり、重量感のある展覧会である。近年同館は撮影可となっているので、作品をスマホに収めつつ鑑賞する若い人が多く行き合い、このような展覧会に若い人の来館が多いのは勇気づけられる。同じく静かに観たのは「豊臣の美術」（大阪市立美術館、4月3日〜4月24日）。豊臣秀吉の神格化をテーマとした展覧会。近年、秀吉伝説を剥がし、「南蛮船」が来た時代をバロック交通の一つの結節点として、多角的な視座から研究する潮流にあるが、常設展でも関連する南蛮漆器などが並べられ興味深かった。同館では時代を感じさせる展示室の一新、それを支える学芸部門の施設も刷新する大リニューアル計画が進められているそうだ。期待したい。

3月末からは大阪の国立国際美術館で「ミケル・バルセロ展」（3月20日〜4月24日）。思弁に絡む現代美術のなかで突き抜けるような爽やかさ、人類原初のエネルギーから立ち上がってくるような、つながっているパワーを感じ、なにか肯定感に満たされる。観るものを勇気づけてくれる作品群なのだ。同様の爽やかさが「ピピロッティ・リスト：Your Eye Is My Island　あなたの眼はわたしの島」（京都国立近代美術館、4月6日〜6月20日）であろう。会場には靴を脱いで入り、映像の前には床にクッションが置かれているなど、ゆったりと観客をくつろがせる配慮がなされている。だが、リビングルームのソファなどに腰掛けると、映像・音楽と設置された家具などの計算された空間に観客は身を置くよう設計されていて、マルチな映像をみながらピピの仕掛けてくる思考に向きあわざるを得なくなる。明るくスローモーションで自動車の窓ガラスを叩き割る《Ever is over all》(1997年)はじめ約40点の展示に溢れ、出色の展覧会。会場は撮影可なので、スマホに画像を収めつつ鑑賞する若い人たちが目についた。

西に目を移してみよう。兵庫陶芸美術館「No Man's Land―陶芸の未来、未だ見ぬ地平の先―」(3月20日〜5月30日）は「陶」をかすめる中堅・若手作家15人の、「陶芸の未来」を考えさせられる重要な展覧会。芦屋市立美術博物館では「植松奎二　みえないものへ、触れる方法―直観」（3月13日〜5月9日）が開催された。60年代初期から活動を続ける作家の大個展。コロナ禍で海外に行くこともなくなった作家がひと夏、思考に沈潜した成果が展示されている。とくに8本の材木がワイヤーとステンレスの水盤だけで平衡を保っている展示は圧巻。その隣の西宮市大谷記念美術館では「石内都展　見える見えない、写真のゆくえ」（4月3日〜7月25日）を開催。関西での大規模な石内都展は同館が嚆矢となる。作家が展覧会前7泊8日近くに泊まり込み、展示の細部にまで石内都色が沁みわたっており、新作《The Drowned》なども展示されている。《連夜の街》展示には、スライド映像がガラスケースの奥の壁に投影されるなど作家納得の工夫が凝らされる。なお同館では当該展の前に「奥田善巳特集」が組まれ、奥田善巳の年譜だけで10頁にわたる冊子が作成されたことも付け加えておこう。

姫路市立美術館「私のマル　小野田實」展（4月10日〜6月20日）は、姫路を拠点に活躍した「具体」の作家、小野田實の丁寧な回顧展である。満州での家族写真から姫路に家族と住み高校時代の油彩画も導入部に展示され、生涯のモチーフとなった「マル」に至る過程、また「マル」以外の多彩な活動なども広く見ることができ、貴重なインタビューも会場で見ることができた。「具体」研究家は必見だろう。筆者が訪れたのは4月中旬であったが、館によれば姫路はコロナ禍の影響はほとんどないとのこと、確かに観客も多く訪れていた。同館は市と協議して、美術館と地域を巻き込む広汎な現代美術への取り組みも進めているようだ。

最後に、横尾忠則現代美術館の《キュミラズム・トゥ・アオタニ》を紹介したい。同館は、元兵庫県立近代美術館の建物。その4階は実は旧近代美術館の事務室、学芸員の勤務フロアであった（道路を隔てた王子動物園の猿や鳥の鳴き声を聞きながら執務していたのだ）。その質素な事務室からは想像もできない空間に、窓際が変質している！「キュミラズム」とは「キュビズム」と「ミラー」を組み合わせた横尾さんの造語らしい。向いの北側の摩耶山を含む風景が万華鏡のようにめくるめく空間となっている。建築家の武松幸治氏の監修によるものだそうだが、こんなことも可能なのだと衝撃を受けた。（同館では「Curators in Panic 〜横尾忠則展　学芸員危機一髪」を開催（3月27日〜8月22日））。アオタニとは横尾さんが新婚時代をすごした美術館近辺の地。

国立国際美術館「ミケル・バルセロ展」会場風景
ミケル・バルセロ　左《トーテム》、右《ドーリアニアステカ式トーテム》（いずれも2019年、作家蔵）
© ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2021

京都国立近代美術館「ピピロッティ・リスト：Your Eye Is My Island　あなたの眼はわたしの島」展会場風景　撮影：表恒匡　©Pipilotti Rist

横尾忠則現代美術館「キュミラズム・トゥ・アオタニ」
写真提供：横尾忠則現代美術館

中国ブロック

2020年の雪舟顕彰

荏開津通彦（えがいつ みちひこ・山口県立美術館）

室町時代の水墨画家・雪舟の生年は1420年（応永27）であり、昨2020年（令和2）は生誕600年を記念する年であった。ゆかりの地である岡山や山口を中心に、展覧会などの顕彰事業が予定されていたが、2019年末の中国・武漢における流行を端緒とする新型コロナウイルス感染症の拡大によって、変更を余儀なくされた事業もあった。

以下においては、戦後の雪舟顕彰のいくつかのエポックを振り返っておくとともに、2020年における「雪舟生誕600年」記念事業の中で筆者の目にふれたものを記録しておきたい。

戦後の雪舟顕彰においてもっとも大きな盛り上がりを見せた年は、「雪舟没後450年」とされた1956年であった。東京、京都の両国立博物館で雪舟展が開催され、『三彩』や『萌春』、『ミュージアム』といった主だった美術雑誌が雪舟特集を組むなど、まさに「雪舟ブーム」の1年であった。この1956年が「雪舟没後450年」というのは、雪舟の没年を1506年（永正3）に比定してのことであるが、実はこの没年説は必ずしも確かな根拠に基づいてのものではない。雪舟の没年に関しては、広く行われる説として1506年没説と1502年没説とがあるのだが、どちらにも確たる根拠はない。史料から考えた場合、1507年（永正4）にはすでに没していることが確実であり、1501年（文亀元）には丹後国天橋立に赴いて、《天橋立図》（京都国立博物館蔵）の制作に携わったことがほぼ確からしいことは分かっているが、この間のどの年に没したのかについての史料は残されていないのである。なお、雪舟の没年については井土誠氏に専論がある（「雪舟没年再考論」『下関市立美術館研究紀要』3号）。

2002年には、1502年没説に立脚した「没後500年」と冠した雪舟の展覧会が1956年と同様に、東京、京都の両国立博物館において開催された。没後450年の記念展覧会が1506年没説にもとづいていたのに、没後500年記念の展覧会では1502年説に変更されているのは、この間に雪舟研究者の中でのコンセンサスが変わったわけではなく、この展覧会事業を両国立博物館とともに主催した毎日新聞社が、この2002年に創刊130年を迎えるという事情によってであった。そしてこの4年後の2006年に、今度は1506年没説を称えて山口県立美術館が「没後500年記念 雪舟への旅」展を開催している。

2020年の生誕600年記念の展覧会は、岡山県立美術館において、2021年2月10日から3月14日の会期で行われた。実は山口県立美術館でも生誕600年記念の「雪舟と狩野派展」の開催が2020年9月15日から10月18日の会期で予定されており、山口と岡山の2ヶ所で雪舟展が開催されるはずであったのだが、山口県立美術館の「雪舟と狩野派展」は新型コロナウイルス感染症の影響で生じたさまざまな問題によって開催が2年後の2022年秋に延期された。

岡山県立美術館での展覧会は、「雪舟と玉堂―ふたりの里帰り」というタイトルで、岡山県出身のこの2人の水墨画家の代表作を展観するものであった。ただし、作品数でいえば、雪舟作品の展示数は、関係作家の作品も含めて38点とかならずしも多数ではないが、《慧可断臂図》（斉年寺蔵）、《秋冬山水図》（東京国立博物館蔵）、《破墨山水図》（東京国立博物館蔵）、《山水図 以参周省・了庵桂悟賛》（個人蔵）、《四季山水図巻》（毛利博物館蔵）と、雪舟筆国宝6点のうち5点が出品され（残り1点は《天橋立図》）、展覧会としての見応えは十分であった。

一方、「雪舟と狩野派展」の開催延期を余儀なくされた山口県立美術館では急遽、館蔵品を中心とする「雪舟600年展」（2020年10月31～12月21日）・「雪舟600年展 Vol.2」（1月9日～3月28日）に企画を切り替えて開催し、それとともに、「国宝《山水長巻》デジタル映像展示」（2020年10月31～3月28日）や、「5GVRで探る山水長巻」（2月23日～3月28日）などの催しを行った。

この他、毛利博物館では例年どおり雪舟の国宝《四季山水図巻》をはじめ、毛利家伝来の優品を一堂に展示する「特別展 国宝」が2020年10月30日から12月5日の会期で開催され、また島根県益田市の益田市立雪舟の郷記念館では、開館30周年記念展として「雪舟イズム―益田家と雪舟流―」が2020年10月17日から12月13日の会期で開催された。

出版物としては、島尾新・山下裕二の両氏の監修による「生誕600年 雪舟決定版」（平凡社、2020年1月）が「別冊太陽」の1冊として刊行された他、雑誌の特集として『禅文化』257号（2020年7月）に「生誕六〇〇年　画僧雪舟 その人間像」、『サライ』2020年3月号に「雪舟への旅」があった。

また、日本水墨画美術協会主催の「画聖雪舟生誕600年」記念シンポジウムが山口市民会館で2020年11月28日に行われ、先述の「雪舟と玉堂展」の記念講演会が岡山県立美術館で2月13日に行われた。

以上、事実の列挙となり恐縮だが、雪舟研究者としては「この年にあったこと」の記録として書き留めておく必要があると考えたためで、読者にはご寛恕のほどお願いする次第である。

山口県立美術館　国宝《山水長巻》デジタル映像展示
（上映時間11分、高さ3メートル、幅30メートル）

四国ブロック

コロナ禍、続く模索と展開
―展覧会とオンラインコンテンツ

長井 健（ながい たけし・愛媛県美術館）

2020年5月14日の日本博物館協会による「博物館における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン」の公表、さらに同月25日に全国での緊急事態宣言が解除されて以降、全国の美術館も概ね再開館し、展示事業を主として活動が再開された。とはいえ、会期の再編成や各種事業の中止・延期措置は免れず、さらに特に大きな影響を受けたのは対面接触を伴う教育普及事業だったことは間違いない。それぞれ現場で検討を重ね、いかに安全な事業を行うかに腐心されたことと思う。

2020年度下半期は、移動制限も比較的緩和されたものの、心理的不安はもちろん払拭されたわけではない。個人的には、事業が下半期に再編されて集中したこともあり、他館の展示をじっくり見るという機会は、引き続き停滞していた。ゆえに、四国他県の展覧会はほぼ実見することが出来ず、本稿も電話などでの聞き取りやWEBからの情報収集に寄るところが大きい。そのような訳で、ブロック報告というにははなはだ不完全なもので大変恐縮であるが、一つの記録としてまとめておく次第である。

まず展覧会としては、以下が各館・各地域の独自性を出したものとして挙げられる。

香川県立ミュージアム「語る武具―ARMOUR & STORIES―」(2020年10月24日～12月6日)は、香川出身の現代美術家・野口哲哉氏が協力し、武具をとりまく「物語」に着目した、総合ミュージアムならではの企画。高松市美術館でも「野口哲哉展―THIS IS NOT A SAMURAI―」(2月6日～3月21日)が開催された(以後、山口・群馬・愛知を巡回予定)。丸亀市猪熊弦一郎現代美術館「窓展　窓をめぐるアートと建築の旅」(2020年10月13日～1月11日)は、当初7～10月の会期だったが、会期変更しての開催。東京国立近代美術館からの巡回で、窓や建築に関する多角的研究を行う「窓学」の総合監修者・五十嵐太郎氏（東北大学教授、建築批評家）が学術協力。

徳島県立近代美術館では、同館が所在する文化の森総合公園の開園30周年記念展として「ドイツ20世紀アート」(2020年10月17日～12月6日)を開催。第一次世界大戦下に鳴門に開設された板東俘虜収容所でのドイツ人捕虜たちと地域住民との文化交流を皮切りに、20世紀ドイツ美術を横断的に見る。前述の「窓展」もそうだが、海外を訪れ、当地の芸術が容易に鑑賞できなくなってもはや久しい中、地方において、これらを間近に鑑賞できることの意義や有難さを痛感する。

高知県立美術館では、「隈研吾展　新しい公共性をつくるためのネコの5原則」(2020年11月3日～1月3日）と「生誕100年 石元泰博写真展」(1月16日～3月14日）の2展が続いた。前者は、東京オリンピック・パラリンピックを控えての開催で、長崎・東京との巡回。県内梼原町には6つの隈建築が存在し、ゆかりの作家展としても好機だった。後者は、コレクションの中核作家の大回顧展で、東京オペラシティ アートギャラリー、東京都写真美術館との共同企画。

最後に愛媛県では、新設の八幡浜市美術館が、昨春の開館予定が延びて8月下旬にオープン。暫定的に展示活動をスタートしていたが、2月6日から3月21日まで開館記念展「笠間日動美術館所蔵 印象派からエコール・ド・パリまで」が無事開催された。愛媛県美術館では、「没後20年 真鍋博2020」(2020年10月1日～11月29日）を開催。コレクションの核となる地元出身のイラストレーターの19年ぶりの大回顧展で、高度経済成長期に活躍した作家であったことから、こちらももとはオリ・パラを踏まえた企画であった。

さて、全国一斉に休館状態となった2020年春頃から、動画配信等のオンラインコンテンツ制作が集中したことは周知のとおり。来館困難者のためのバーチャル展示としてはもちろんだが、従来形態での教育普及事業が実施できない中での、あくまで仮設の代替策という意図で実施されたものも少なくなかっただろう。筆者勤務の愛媛県美術館も、もともとこの分野はかなり出遅れていたが、やはり休館中に「けんびのワークショップ mini！」と題して、コマ撮りアニメーション「色コレクション（赤･青)」を自作、動画配信したことをきっかけに、ようやくオンライン事業に着手した（現在は、コレクション紹介や鑑賞プログラムなども加えた公式YouTubeチャンネルを開設)。

今回、改めて正会員各館のサイトを一とおり拝見したが、中でも徳島県立近代美術館は群を抜いて豊富なコンテンツがあり、制作の労力を拝察する。その他、いち早く「おうちミュージアム」に賛同していた香川県立ミュージアムの「ネットで学べる動画シリーズ」や、高松市美術館の「おうちでアート（制作編、鑑賞編)」、高知県内の施設が参加する「こうちミュージアムネットワーク」の公式YouTubeチャンネルなど、四国においても特色ある企画が展開されている。ユニークなところでは、大塚国際美術館のTikTokアカウント開設や、町立久万美術館による人気ゲーム「あつまれどうぶつの森」内での作品画像配布なども挙げられる。

この未曽有の状況下、急速に進展している感もあるオンラインへの取り組みであるが、「アフター・コロナ」が本当に訪れたとして、最終的にはやはり「実物と出会える場」である美術館の存在と双方向で機能する時に、その真価が問われてくるのではないだろうか。

香川県立ミュージアム「語る武具―ARMOUR & STORIES―」展会場風景
写真提供：香川県立ミュージアム

徳島県立近代美術館公式ホームページより

九州ブロック

コロナ禍のミュージアム

宗像晋作（むなかた しんさく・大分県立美術館）

2020年度の下半期、私たちを取り巻く状況は、上半期にも増して目まぐるしく変化した。7月下旬より始まった「Go To キャンペーン」は、9月に誕生した菅義偉政権に引き継がれた経済支援政策であったが、11月の新型コロナウイルス感染症の第3波襲来によって、年末には全国一斉停止となった。しかし感染者数の増加は抑えられず、2021年1月8日から3月21日まで、11都府県に2回目の緊急事態宣言が発令された。九州では感染者数が著しく増加した福岡県が対象地域とされ、県境をまたぐ往来の自粛や、飲食店や公共施設等の営業時間に制限がなされた。

振り返ってみれば、2020年度の下半期もずっと、新型コロナウイルスとの闘いだったといえる。ワクチンが普及し、その効果が実証されるにはまだまだ時間がかかると言われ、この闘いが長期戦となることを多くの人々が覚悟した時期だった。「ウィズ・コロナ」という言葉を頻繁に聞くようになったのもこの頃である。新型コロナウイルスの存在と脅威を念頭に置きながら、日常生活をはじめ、社会的な営みや活動を工夫しながら継続させていこうとする前向きな言葉として用いられている。

2020年度上半期には、一時多くの美術館が臨時休館へ追い込まれたが、下半期においては、2回目の緊急事態宣言時においても、多くの館はさまざまな感染予防対策を講じた上で、開館を継続させていた。美術展は、輸送費や保険料など、莫大な経費がかかっていることが多く、中止となれば大きな費用的損失を被ってしまう。美術館は「ウィズ・コロナ」を受け入れ、何とかしてコロナ禍を乗り切ろうとしていたわけである。しかし、努力と苦労の反面、美術館の運営状況はどこも厳しいのが現実であろう。

私が勤める大分県立美術館でいえば、2020年度の総来館者数は、約25万人であった。これは前年度の約53万人の半数以下である。当館では、年間の来館者数（館内無料スペース入館者数含む）の目標数値が50万人に設定されており、開館2年目を除いて、いずれの年も目標を超えていた。2020年度は、1回目の緊急事態宣言に伴う約1ヶ月におよぶ臨時休館や、貸館事業や催事の中止があった他、コロナ禍による観光客数減、高齢者の外出控えなどが大きく影響したと考えられる。開館5周年の記念年として、多くの企画展を用意していたにもかかわらず、開館以来、最も来館者数が低減したのである。詳細な統計を待ちたいが、2020年度は全国的にみても、前年度の50%程に総来館者数が低減したという館が多数に上ることが明らかになりつつある。

周知のことであるが、美術系の展覧会では、主催者を実行委員会形式として、新聞社やテレビ局など、民間のメディア事業部と美術館が共同出資した展覧会も少なくない。昨今、民間メディアは、より展覧会事業の収支に敏感でシビアである。コロナ禍における来館者数の低減傾向は、入場料収入の大幅なマイナスとなる。メディアが出資するような、今までは普通に集客が期待できた大型の巡回展等においても、このコロナ禍の低迷ではそもそも展覧会事業を収支的に成り立たせること自体が難しくなっていると感じる。

より厳しい事例として、展覧会どころか施設自体の存続が危ぶまれた福岡県柳川市にある立花家史料館の事例をあげよう。戦国武将・立花宗茂を初代藩主として、江戸時代を通じて柳川の地を治めた大名・立花家の美術工芸品や資料、約3万点を所蔵する立花家史料館は、公益財団法人立花財団が運営する史料館である。普段は「川下り」で有名な観光地としても賑わうが、コロナ禍によって入館者数が前年度の半分にも届かない状態に陥ったという。運営費を入館料収入で賄っていた財団は、次年度解散を免れない状態となった。ずっと地元柳川で保存・公開されてきた国宝・重文を含む3万点に及ぶ貴重な美術工芸品も散逸の危機に瀕した。

立花財団は、2020年12月から翌年1月末にかけて、最終的な策として、クラウドファンディング（CF）に挑戦した。結果、CF開始初日に目標の600万円に至り、4日目には新たな目標1,200万円を達成、最終的には2,262万円という目標の3倍を超える額を集め、財団の解散、コレクション散逸の危機を免れている。立花宗茂という著名武将をはじめ、希少な刀剣などのコレクションの価値を熟知し、長年積極的に展示活動等でその魅力を発信し続けた同館の活動が広く認知されていたことが、この難局を突破できた大きな理由の一つではないだろうか。

様々な社会活動、政治、経済、そして人間の精神に全世界規模で影響を与え続けているコロナ禍は、いったいいつまで続くのだろうか。コロナ禍は多くの社会的課題を顕在化させ、コロナ後の社会に大きな変化をもたらすと予想される。美術館を取り巻く状況も、元に戻るというよりは、コロナ後の社会が求める性質のものに適応していく必要があるのではないだろうか。コロナ禍の真っ只中にいる私には、その姿は模糊として明瞭に見えない。まだ厳しい状況が続きそうである。試行錯誤を続ける皆様にエールを送りたい。

立花家史料館の展示室

新規正会員紹介

NO. 1

自然と彫刻が相響する野外彫刻美術館

安田侃彫刻美術館 アルテピアッツァ美唄

〒072-0831 北海道美唄市落合町栄町

© 小川重雄

TEL/FAX：0126-63-3137
E-mail: arte@artepiazza.jp

［開館時間］
午前 9 時から午後 5 時まで

［休館日］
火曜日、祝日の翌日（日曜日は除く）、
12 月 31 日～1 月 3 日

［開館時期］
1992 年 7 月 10 日

かつて炭鉱町として大きく栄えた美唄市。炭鉱は一山一家といわれる濃密なコミュニティに支えられ、札幌に先んじて映画や舞台がやってくるほどの街でしたが、時代の流れの中で、1973 年には市内すべての炭鉱が閉山しました。

多感な少年期を美唄で過ごした安田侃は、彫刻の道を進み、20 代でイタリアへ渡ります。後年、日本でのアトリエを探すために故郷の旧小学校跡を訪れた際、荒れ果てた旧校舎周辺を元気に遊びまわる子どもたちを見かけ、心を動かされます。「未来を担う子どもたちが自由に心を広げられる広場を創ろう」という安田の思いに共感した美唄市と有志の方々が手を携え、1992 年にアルテピアッツァ美唄をオープンしました（2016 年に博物館登録され、名称を「安田侃彫刻美術館アルテピアッツァ美唄」と変更）。

安田侃はミラノ、ローマ、フィレンツェなどで野外彫刻展を成功させ、現在も世界で活躍する彫刻家ですが、年に何度かは必ずアルテピアッツァ美唄に帰り、彫刻が「呼吸できる場所」を見極めながら、この稀なる芸術空間づくりに携わり続けています。

7 万㎡に及ぶ敷地には、触れることも座ることも自由な約 40 点の彫刻が点在し、四季折々の自然と彫刻が調和する風景が広がります。

小学 4 年生以上なら誰でも参加できる彫刻の授業「こころを彫る授業」（月一回開催）はイタリアの大理石などを素材に、自身の心を形にしていく体験型授業で、全国各地から参加者が訪れています。

この空間の管理運営を担うのは、認定 NPO 法人アルテピアッツァびばい。エリアを越えて参加する約 600 名の「アルテ市民ポポロ」が、会費や寄附の他、環境を守るための様々な活動に参加し、運営を支える柱の一つとなっています。

アルテピアッツァ美唄は、文字どおり、芸術広場に身を置き、自分を取り戻し、自由に過ごすことができる空間として、自然、人、芸術の新しいあり方を提案してきました。コロナ禍で暮らしの在り様が問い直されようとしている今、量的拡大に頼らず、心に響く静かな佇まいを守り続けるアルテピアッツァ美唄の取り組みは、地域づくりの新たな挑戦として、注目されています。

開館からまもなく 30 年。「アルテピアッツァ美唄」は、繁栄と衰退というこの土地ならではの歴史と文脈の上で成り立ちながら、普遍性を携え、共感を呼ぶ野外彫刻美術館として、多くの人に親しまれています。

（泉 沙希・いずみさき）

新規正会員紹介

NO. 2

未来へつなぐ　とちぎの歴史　文化・芸術の創造

栃木市立美術館

〒328-0016　栃木県栃木市入舟町 7-26

TEL: 0282-25-5300
FAX: 0282-22-5168
E-mail：k-museum@city.tochigi.lg.jp

［開館時間］
午前 9 時 30 分から午後 5 時まで（入館は午後 4 時 30 分まで）

［休館日］
月曜日（祝日の場合は翌日）、休日の翌日、12 月 29 日～1 月 3 日

［開館時期］
2022 年秋

栃木市立美術館は「未来へつなぐ　とちぎの歴史　文化・芸術の創造」をコンセプトとして収集・保存、調査研究、展示、教育普及という美術館の 4 つの基本機能に交流、情報の受発信を加えた 6 つの機能を掲げ、市民が歴史・文化・芸術を楽しみ、広め、創る拠点として旧栃木市役所本庁舎跡地に建設され、2022 年秋に開館を予定している。美術館の隣には大正時代に建てられた市指定文化財旧栃木町役場をリノベーションした栃木市立文学館（2022 年春開館予定）が立ち、近隣には歴史的な建物や旧跡が多く残ることから、美術館の建物は歴史ある文学館の建物や市の街並みと調和するデザインとなっている。また、一帯には小学校、高等学校、保育園、市民交流センターがあり、文化、教育ゾーンとなっている。

当館には、展示室Ａ・Ｂ・Ｃの 3 室と多目的室があり、展示室Ａ・Ｂでは企画展を、展示室Ｃでは主に収蔵品展を行っていく予定である。また、多目的室では講演会やワークショップなどを開催し、利用者が参加・活動できる場として想定している。そのため、館内は展示スペースの有料ゾーンと教育普及・交流・情報発信活動等を目的とした無料ゾーンとに分けられている。

栃木市は江戸時代初期から日光例幣使街道の宿場町として賑わいをみせ、また町中を流れる巴波（うずま）川を利用した江戸との舟運によって繁栄した。そのため、江戸時代には多くの文人や墨客、狂歌師としても名を馳せた江戸時代中後期の浮世絵師、喜多川歌麿が当地を訪れたといわれており、当館では歌麿の肉筆画 3 点を所蔵している。そのほか、明治以降に活躍した市ゆかりの作家、清水登之や刑部人、田中一村らの作品や竹工芸で重要無形文化財保持者に認定された飯塚小玕齋の作品、近現代の陶芸家の茶陶器や水滴など、約 2,500 点を所蔵している。

当館は、文学館と同一エリアにあることが大きな特徴であり、美術館と文学館それぞれの個性を生かしつつ、機能分担と施設の一体的な活用を図ることで連携を生み出し、事業の充実を図っていく計画である。利用者が安全で快適に集い、憩い、賑わいを創出し、文化受発信の拠点となることを目指している。

（山口加奈子・やまぐちかなこ）

新規正会員紹介

NO. 3

想像力とアニマに遊ぶミュージアム

角川武蔵野ミュージアム

〒359-0023 埼玉県所沢市東所沢和田 3-31-3 ところざわサクラタウン 内

© 角川武蔵野ミュージアム

TEL: 04-2003-8700
FAX: 04-2003-8704
HP: https://kadcul.com/

［開館時間］
午前 10 時から午後 6 時まで、金曜・土曜のみ午後 8 時まで
（入館は閉館の 30 分前まで）

［休館日］
第 1・3・5 火曜日（祝日の場合は開館、翌日休館）、年末年始

［開館時期］
2020 年 11 月 7 日

角川武蔵野ミュージアムは、2020 年 11 月に埼玉県所沢市の東所沢にオープンした（公財）角川文化振興財団が運営する私設ミュージアムである。当館は美術館・図書館・博物館が融合した文化複合施設であり、編集工学者・松岡正剛、博物学者・荒俣宏、建築家・隈研吾、芸術学・美術教育の神野真吾による監修のもと、メインカルチャーからポップカルチャーまで多角的に文化を発信することを目的にしている。

当館には大きく三つの魅力があるのだが、まずは何といってもミュージアムの核となる建築物である。国立競技場の設計に参画したことでも知られる世界的建築家・隈研吾が設計を手がけ、石を用いた作品として代表作の一つになった。東所沢に突如として出現した 5 階建ての巨大建築は、まるで武蔵野の台地から隆起したようにも、地球に突き刺さった巨大な岩の塊のようにも見える。外壁には約 2 万枚の花崗岩を使用し、見る角度や天気、時間帯、立つ場所によって全く異なる表情を見せてくれる。

二つ目の魅力は、美術・図書・博物の融合を体感できる施設であることだ。特にこの 3 館融合を体感できるエリアが、4 階のエディットタウンである。美術・図書・博物の三つのエリアの様々な不思議や発見から、知的好奇心を刺激されることだろう。図書館の中庭的存在のエディット アンド アートギャラリーでは、美術だけでなく図書と融合した企画展も行っている。

三つ目の魅力は、ミュージアムの全体に通ずるコンセプト High & Low である。マンガ・ラノベ図書館やアニメミュージアムでは角川が得意とするポップカルチャーを展開し、武蔵野をテーマとした武蔵野ギャラリーと武蔵野回廊では地域と関わりを持った展示を、1,000㎡のグランドギャラリーでは大規模な企画展を開催する。常設展示「荒俣ワンダー秘宝館」では、本物と偽物をないまぜに展示するワンダーの部屋と、生物の美しさや不思議を体感できるサイエンスアートの部屋を常時体感することができる。

代表的な収蔵品は、日本画家の髙山辰雄、奈良美智や鴻池朋子をはじめとする現代アートで、角川映画を含む映画資料も多数収蔵している。また、荒俣宏コレクションの博物画や美人画、オートマタ等も主要コレクションである。館内の図書館では 5 万冊以上の本を読むことができ、アートと本に囲まれる空間を楽しめる。このように 3 館融合ゆえ紹介したい内容は収まりきらないほどあるが、今後も三つの魅力を軸に東所沢から様々な文化を発信していきたいと考えている。

（大竹真由・おおたけまゆ）

新規正会員紹介

NO. 4

幅広い層に絹の魅力やすばらしさを発信

シルク博物館

〒231-0023 横浜市中区山下町 1 番地（シルクセンター 2 階）

TEL: 045-641-0841
FAX: 045-671-0727
HP : https://www.silkcenter-kbkk.jp/museum/

［開館時間］
午前 9 時 30 分から午後 5 時まで（入館は午後 4 時 30 分まで）

［休館日］
月曜日（祝日の場合は翌日）、
年末年始（12 月 28 日～1 月 4 日）、臨時休館あり

［開館時期］
1959 年 3 月 12 日

シルク博物館は、1959 年 3 月、横浜開港 100 年記念事業として国、県、横浜市及び関係業界の協力により、貿易・観光の振興、とくに生糸及び絹製品貿易の振興発展を目的として建設されたシルクセンター国際貿易観光会館の中に開設された。所在地の山下町 1 番地は、横浜開港当初、英国商社ジャーディン・マセソン商会（通称：英一番館）があった場所で、横浜港大さん橋や山下公園、横浜中華街にも近く、みなとみらい線日本大通り駅から徒歩 3 分という好立地にある。建物の設計は日本のモダニズム建築の先駆者として著名な坂倉準三で、シルク博物館はその 2、3 階部分に入っている。

展示室は上下 2 階に分かれており、エントランスから続く下の階では、絹を生み出す蚕の生態から始まって、養蚕、製糸、染織の技術に関する展示のほか、蚕糸業と横浜の歴史、新たな技術開発によって生み出されたシルク製品などを紹介している。上階展示室では、古代から現代に至るまでの日本の服飾の移り変わりを見ることができるほか、アジアを中心とした世界の民族衣装、人間国宝作家の着物など、優れた絹の工芸品の数々を展示している。さらに、年 2 回、春は収蔵品を中心とした企画展、秋は特別展を開催している。特別展としては隔年で「全国染織作品展」と題して絹を使った染織工芸品の公募展を開催しており、今年で 26 回目を数える。

また、教育普及事業にも力を注いでおり、真綿や紬糸の伝統技術を紹介する実演・講習会のほか、染織体験講座や子ども向けワークショップを開催している。特に蚕の飼育を軸として「チャレンジ！かいこプログラム」と名付けた事業を年間を通じて展開しており、5 月に学校を対象とした蚕の卵（蚕種）の頒布と教員対象の蚕の飼育講座を実施し、夏休み期間中は集中的に子ども向けワークショップを開催、冬季には自由研究の成果や繭クラフトなどの作品発表の場を提供している。

当館は開館以来、幅広い分野にわたってシルク製品とその関連資料を収集保存し、さまざまな角度からその公開に努めてきた。2021 年 6 月現在の収蔵資料点数はおよそ 6,800 点で、その 9 割近くを絹の染織工芸品が占め、江戸時代の小袖や人間国宝作家による着物など貴重な作品も数多く含まれている。今後も収蔵品の充実に努めるとともに、世界でも数少ない絹専門の博物館として、幅広い層に絹の魅力やすばらしさを発信していきたいと考えている。

（高橋典子・たかはしのりこ）

新規正会員紹介

NO. 5

戦後美術の豊かさを世に発信

東京オペラシティ アートギャラリー

〒163-1403　東京都新宿区西新宿 3-20-2

TEL：03-5353-0447
FAX：03-5353-0776
E-mail: ag-press@toccf.com

［開館時間］
午前 11 時から午後 7 時まで（入館は午後 6 時 30 分まで）

［休館日］
月曜日（祝日の場合は翌日）、年末年始、
全館休館日（2 月第 2 日曜日、8 月第 1 日曜日）

［開館時期］
1999 年 9 月 9 日

東京オペラシティアートギャラリーは、新国立劇場の建設を機に官民一体で開発された「劇場都市」東京オペラシティ街区の文化施設群の中核の一つとして 1999 年 9 月に開館し、公益財団法人東京オペラシティ文化財団が運営する美術館である。ひろく芸術文化の振興・発展を目的に、コレクター寺田小太郎氏（1927-2018）の蒐集、寄贈になる寺田コレクションの収蔵・公開と、今日的でアクチュアルな視点にたつ近・現代美術の企画展の開催、国内の若手平面作家を紹介する展覧会シリーズ「project N」の開催など、多彩な活動を意欲的に行っている。

寺田コレクションの寄贈者寺田小太郎氏は、東京オペラシティ街区の元地権者の一人で、先祖代々 400 年以上にわたり受け継いだ土地を提供するにあたり、個人として唯一、東京オペラシティビルの共同事業者に名を連ね、国からの美術館創設の要望に応えてその実現に積極的に協力するとともに、収蔵すべき美術作品の蒐集にあたった。コレクションは、難波田龍起・史男父子の作品約 630 点をはじめとして、戦後日本を中心とする絵画、彫刻、陶芸、水彩・素描、版画、写真等、およそ 4,000 点に及んでおり、寺田氏個人の美意識に裏打ちされた独自性と、戦後美術の広範囲をカバーする包括性を兼ね備えた内容となっている。当館では開館以来、様々なテーマにもとづいて収蔵品展を開催し、コレクションの独自性、多様性、そして戦後美術の豊かさを世に発信してきた。

企画展については、展示室の天井高 6m の大空間の強みを生かし、また同時代性を強く意識した現代美術展の開催を特色の一つとしつつ、クロスジャンルを意識して建築、デザイン、写真、ファッションなどに対象を拡大するとともに、20 世紀の重要な作家、動向に今日的な視点から光をあてる展覧会など、真に現代性のある美術とは何かを念頭に、積極的な取り組みを行っている。

「project N」は、寺田コレクションの中心作家・難波田龍起（1905-1997）の遺志を受け継ぎ、国内の若手平面作家の育成・支援を目的として開催している展覧会シリーズで、学芸員が推薦した作家のなかから財団内の選考委員会で選ばれた作家を、年に 4 人を基本に紹介している。

当館は、京王新線初台駅から徒歩 5 分（東口直結）の新宿区西新宿、東京オペラシティビルの 3 階、4 階に位置する。通常、企画展を 3 階のギャラリー 1、2（天井高 6m）にて、収蔵品展を 4 階のギャラリー 3、4（寺田小太郎メモリアルギャラリー）にて、project N を 4 階コリドールにて、年 4 回の展示替えを基本に開催している。　（福士 理・ふくしおさむ）

新規正会員紹介

NO. 6

南青山の『家』でピカソの思いに触れる経験を

ヨックモックミュージアム

〒107-0062　東京都港区南青山 6-15-1

TEL: 03-3486-8000
FAX: 03-3486-8001
E-mail：info@yokumokumuseum.com

［開館時間］
午前 10 時から午後 5 時まで（入館は午後 4 時 30 分まで）
金曜日は午前 10 時から午後 8 時まで（入館は午後 7 時 30 分まで）
＊現在、感染症対策のため金曜の夜間開館は中止しています。

［休館日］
月曜日（月曜日が祝日の場合は開館）、年末年始、展示替期間

［開館時期］
2020 年 10 月 25 日

ヨックモックミュージアムは、20 世紀を代表する芸術家パブロ・ピカソ（1881-1973）によるセラミック作品を主とする「ヨックモックコレクション」を公開するために、2020 年秋、コロナ禍に沈む東京に、一つの希望を灯すように開館した。

同コレクションは、洋菓子製造販売業「ヨックモック」創業家の 2 代目経営者で現会長の藤縄利康が約 30 年をかけて精選したもので、ピカソのセラミック作品を中心に、油彩や版画等約 500 点で構成される。

中でも大半を占めるセラミック作品のうち、ピカソと熟練の職人とが協働して制作したエディション作品については、質量ともに世界有数のもの。ピカソ自身の慎重な管理のもとで限定数が制作されたエディション作品は、当時のピカソが指向した、普通の人々の日常に喜びをもたらす芸術への思いから生まれており、これはお菓子がもたらす温かい笑顔を願うヨックモックの姿勢とも通じる。

当館の展覧会活動は、コレクションに基づく自主企画の展覧会を基本としているが、ピカソの自由で創造性に満ちた精神に倣い、いずれ様々な企画や展覧会を打ち出していくことを志している。またラーニングの活動にも力を入れており、現時点では、アートセラピーを基礎とする「YM アートセッション」や当館独自のワークショップ「ピカソ de アート」他、多彩なプログラムが並んでいる。

東京メトロ「表参道」駅から徒歩約 10 分の南青山の住宅地に佇む都市型の美術館であり、展示室は全部合わせても 1,000 平米に満たない小さなスペースながら、来館者を「家」に招くように温かく迎え入れ、作品との親密な出会いを提供することを目指している。展示室は、抑えた照明のなかで作品とじっくり対峙する地階と、一転、外光を取り入れた明るい空間で作品と共にある喜びを味わう 2 階に分かれており、その変化も当館ならではの経験として楽しんでいただきたい。

1 階には、ライブラリー、ショップ、カフェが中庭を囲む開放的な空間に共存し、ライブラリーではラーニングのイベントが開催され、また、来館者と学芸員が資料を共有する。

館内のサインワークは廣村デザイン事務所と陶芸家の荒木漢一氏によるもので、優れたデザイン性と分かりやすさで来館者にも好評だ。

街歩きのついでに気軽に立ち寄れる美術館として、ピカソのセラミック作品がもつ、空間性をもったのびやかで表現の喜びに満ちた世界との出会いを、様々な工夫で提供していきたい。

（富安玲子・とみやすれいこ）

新規正会員紹介

NO. 7

文化の交流地点としての賑わいを再びこの地で

サイトウミュージアム準備室

〒515-0052　三重県松阪市山室町 2275

石井柏亭《風景》1935 年　油彩・キャンヴァス

TEL：080-9735-5656（準備室直通）
FAX：0598-29-0096
E-mail: 準備中

［開館時間］
未定

［休館日］
未定

［開館時期］
2022 年 5 月 8 日開館予定

サイトウミュージアムのコレクションは、精神科医・齋藤洋一が、単に作品の美しさのみならず、作家の制作に傾ける情熱や、時代を超えて訴えかけてくるひたむきな姿勢に想いを寄せ収集した、約 3,000 点の作品からなる。中にはこれまでの美術史の主な流れからこぼれ落ちてしまった作品も数多く含まれるが、そのような作品をも分け隔てなく丁寧に拾い上げることにより、近世から近現代美術の再評価を試みることを私たちはミュージアムの使命の一つとしている。

地元、松阪ゆかりの本居宣長や韓天寿の書画、日本画家の宇田荻邨、洋画家の中谷泰などの作品も収集対象として重視しているが、たとえば九州地方であれば高木背水、和田英作、児島善三郎、牛島憲之、海老原喜之助、瑛九、糸園和三郎、赤星孝、また北海道であれば上野山清貢や田辺三重松、三岸好太郎、西村計雄らの作品も何点か所蔵しており、内外の作家を問わず様々な作品をご紹介する予定である。

この松阪の地は 1588 年蒲生氏郷が松坂城を築城してより、400 年超の歴史のある城下町であり、さらに伊勢神宮へと通じる街道沿いの宿場町として、また三井高利ら豪商を輩出した商人の町として各地から文人や絵師らが訪れた。その文化の交流地点としての賑わいが、再びこの地で実現されることを願っている。

本格的な開館はしばらく先となるが、2022 年 5 月に、松阪駅から徒歩圏内にあるスペースにて仮オープンを行うことを考えている。コレクションは開催予定の展覧会にあわせて今後も充実させ、それらが将来的には豊かな複数の線となって、美術の多様性を提示できればと思う。

また、近隣には小中学校、繊維デザイン科のある高等学校などが存在し、鑑賞教育等の諸活動を通じて作品の多角的な研究を深めることも可能ではとないかと考えている。

このミュージアムが地域に根ざし、そして美術の力で更に活力のあるまちづくりに貢献することとなれば幸いである。　（田中善明・たなかよしあき）

新規正会員紹介

NO. 8

京都の歴史と文化を通覧できる博物館

京都府京都文化博物館

〒604-8183 京都府京都市中京区高倉通三条上ル東片町 623-1

TEL: 075-222-0888
FAX: 075-222-0889
URL: http:// www.bunpaku.or.jp
E-mail: office@bunpaku.or.jp

［開館時間］
午前 10 時から午後 7 時 30 分まで（入場は午後 7 時まで）

［休館日］
月曜日（祝日は開館、翌日休館）、12 月 28 日～ 1 月 3 日

［開館時期］
1988 年 10 月 1 日

京都文化博物館は、1988 年 10 月に京都の歴史と文化をわかりやすく紹介する総合的な文化施設として開館した。京都府が設置し、運営を財団法人京都文化財団（2013 年に公益財団法人に認定）が 30 年以上にわたって担ってきた。

立地に恵まれ、オフィス街や繁華街に隣接する交通至便なところに位置しているため、日常空間の延長線上にある親しみやすい施設として多くの人々に愛されてきた。いわゆる威風堂々とした非日常空間の美術館・博物館とは一線を画した魅力が持ち味ともいえる。

施設は、開館当初に建てられた本館と、近代の洋風建築の別館からなる。明治のこの建物は、東京駅の設計者としても知られる辰野金吾とその弟子長野宇平治の設計によるもので、1906 年に竣工、日本銀行京都支店として使われ、1969 年に国の重要文化財に指定されている。赤煉瓦に白い花崗岩を装飾的に配した左右対称の外観は、明治時代の地域の繁栄を物語るシンボルの一つであり、京都文化博物館の顔として、ホールでは展覧会のほか音楽会などさまざまな催事を開催している。

開館時より、「京都の歴史と文化を通覧できる博物館」、「京都にかかわる美術工芸家の作品を展示する美術館」、「京都に始まった映像文化を展示・公開する映像センター」の三つを博物館の機能の柱に据え、幅広くかつ奥深い京都文化の紹介に努めてきたが、2011 年には、「ほんまもん」を体感できる博物館をコンセプトにリニューアルオープンし、新たなスタートを切った。

所蔵する資料は、美術・工芸や郷土玩具分野を中心とした約 54,000 点の京都府所蔵（京都文化博物館管理）資料と、歴史（埋蔵文化財を含む）や映像資料などの京都文化博物館蔵資料の二つに分けられる。近世京都の文人画家として知られる池大雅のコレクションのほか、映画関係資料には日本映画産業発祥の地、日本のハリウッドとも呼ばれた京都ならではの貴重なものが揃っている。

特別展のほか、多彩な所蔵資料を積極的に活用した展示・公開を行うとともに、開かれた博物館として貸しギャラリーやボランティアスタッフの受け入れ、学校や地域との連携など様々な事業に幅広く取り組んでいる。その事業の向こう側に、京都文化の新たな創造と発展、それらを担う次世代の育成に寄与することを期待して。

（洲鎌佐智子・すがまさちこ）

ZENBI［Vol.11-20］総目次

［全美フォーラム］ 号・頁

〈Vol.11〉

岩崎千夏｜市民の「心の避難所」として―地震から半年― 11・F-02

中山喜一朗｜春画公開に関する私的回顧―福岡市美術館「肉筆浮世絵の世界」 11・F-05

稲庭彩和子｜専門職の連帯と情報公開―「国際博物館会議ミラノ大会 2016」参加記 11・F-08

〈Vol.12〉

桝田倫広｜展覧会の会場構成を建築家と協働することについて 12・F-02

本橋弥生｜「MIYAKE ISSEY 展：三宅一生の仕事」の展示デザインについて 12・F-05

丹羽晴美｜東京都写真美術館リニューアル・オープン―裏話 12・F-09

村上博哉｜世界遺産登録から 1 年 12・F-12

〈Vol.13〉

木下直之｜美術館の活動の自由について 13・F-02

前田希世子｜美術館において、ゲストキューレーターを迎えてコレクションをベースにした展覧会を開催することについて 13・F-06

山口洋三｜図録を倉庫で死蔵させないために 13・F-09

安田篤生｜美術館・カメラ・SNS―21 世紀的三題噺 13・F-13

〈Vol.14〉

杉山享司｜文化財調査を通して返還問題を考える 14・F-02

向山富士雄｜地方の小規模公立美術館を活性化するための一可能性について―新たな視点により県内文化圏の構図を描き直してみる― 14・F-05

雪山行二｜いま美術館名に「近代」は必要か? 14・F-08

山田 諭｜京都市美術館の夢 14・F-12

青木加苗｜日本の美術館と学芸員の未来を描くために―「シンポジウム　これからの博物館の在るべき姿〜博物館法をはじめとする関連法等の改正に向けて〜」報告 14・F-15

〈Vol.15〉

山梨俊夫｜『現場で使える 美術著作権ガイド』改訂版を準備中 15・F-02

小林 仁｜陶磁専門美術館の国際展 15・F-04

菅谷富夫｜新しい美術館の開館準備報告パート 2 15・F-07

奥村泰彦｜二つの 80 年代展をめぐって 15・F-09

〈Vol.16〉

松嶋雅人｜「マルセル・デュシャンと日本美術」展開催の目的とその成果 16・F-02

副田一穂｜公共財としてのコレクション画像 16・F-05

谷口英理｜身の丈にあったミュージアム・アーカイブズの確立に向けて 16・F-08

大森拓土｜東京と島根の北斎展 16・F-12

〈Vol.17〉

栗原祐司｜ ICOM 京都大会の成果と今後の展望 17・F-02

堀内しきぶ｜ ICOM 京都大会　国際委員会の活動を振り返って 17・F-04

滝本昌子｜美術館が行う、ビジネスパーソン向けの鑑賞セミナー 17・F-07

真住貴子｜ MANGA の国際展　その諸課題の共有 17・F-10

能勢陽子｜あいちトリエンナーレ 2019・その後 17・F-13

〈Vol.18〉

山梨俊夫｜あいちトリエンナーレ 2019 の電凸対策に学ぶ 18・F-02

村田眞宏｜川崎市市民ミュージアムの被災と救援活動（報告） 18・F-06

松山沙樹｜新しい世界にふれる鑑賞プログラム　京都国立近代美術館「感覚をひらく」事業から 18・F-11

笠原美智子｜美術館の管理職に女性が次々と進出している。美術館は変わるのか? 18・F-14

〈Vol.19〉

末武伸往｜一般社団法人化を振り返って 19・F-02

桝田倫広｜ピーター・ドイグ展の新型コロナウイルス（感染予防策以外）の対応について 19・F-04

西野正恵｜コロナ禍の「フランス絵画の精華展」を終えて 19・F-08

木村絵理子｜「ヨコハマトリエンナーレ 2020：AFTERGLOW －光の破片をつかまえる」―新型コロナウイルス感染拡大の影響下での開催 19・F-11

吉原美恵子｜コロナ禍下の「それぞれのながめ―河合美和、児玉靖枝、増田妃早子、渡辺智子」展 19・F-16

〈Vol.20〉

逢坂恵理子｜一般社団法人全国美術館会議　第 35 回学芸員研修会「アフターコロナに向けて〜美術館運営支援を考える」報告 20・F-02

大野正勝｜川崎市市民ミュージアムの被災直後の状況と対応 20・F-6

青木加苗｜博物館法は誰のものか 20・F-10

阿佐美淑子｜展覧会の中断、中断延長、再開、会期延長を経験した「画家が見たこども展」 20・F-13

塚田美紀｜「作品のない展示室」、アーカイブ展示「建築と自然とパフォーマンス」、そしてパフォーマンス「明日の美術館をひらくために」 20・F-16

瀧川織恵｜アトリエの再開をめぐる 2020 年 20・F-19

［ブロック報告］ 号・頁

〈北海道ブロック〉

ひとつの時代、ひとつの節目　五十嵐聡美（北海道立帯広美術館） 11・02

たまには足踏みして、“ 展覧会 ” のことなど、考えてみる　鎌田 享（北海道立近代美術館） 12・02

北の大地の展覧会など　瀬戸厚志（釧路市立美術館） 13・02

なとわ・ほっかいどう・美術展　寺嶋弘道（本郷新記念札幌彫刻美術館） 14・02

アートギャラリー北海道 ― 美術館相互のつながりをめざして　苫名 真（北海道立近代美術館） 15・02

新たな連携とそれぞれの update　佐藤友哉（札幌芸術の森美術館） 16・02

美術館相互の連携とネットワーク　佐藤由美加（北海道立旭川美術館） 17・02

掘り起こし　新明英仁（市立小樽美術館） 18・08

コロナ禍における博物館活動と国立アイヌ民族博物館の開館　霜村紀子（国立アイヌ民族博物館） 19・02

「現実の空間」の体験　久米淳之（北海道立近代美術館） 20・02

〈東北ブロック〉

震災から 5 年目を迎えて　平野明彦（いわき市立美術館） 11・04

震災 5 年、足下を見つめなおす　吉田尊子（岩手県立美術館） 12・04

ある郷土作家の顕彰について　諸橋英二（公益財団法人諸橋近代美術館） 13・04

雪どけの後に―美術のタネ、芽吹く東北　奥脇嵩大（青森県立美術館） 14・04

地域に寄り添うということ　萱岡雅光（リアス・アーク美術館） 15・04

地域に根差した地方美術館の活動　平澤 広（萬鉄五郎記念美術館） 16・04

「国土強靱化」から「黒土強靱化」へ 〜 地方におけるアートとは　高橋しげみ（青森県立美術館） 17・04

東北地方の展覧会から―ゆかりの作家に注目して―　土生和彦（宮城県美術館） 18・10

新型コロナウイルス感染症が拡大　東北地区美術館の動向　池田良平（天童市美術館） 19・04

「いま」に収蔵品を提示すること　鈴木 京（秋田県立近代美術館） 20・04

〈関東ブロック〉

美術館が発信するメッセージ　青木 忍（高崎市タワー美術館） 11・06

地域、社会と向きあって、それぞれの応答　中尾英恵（小山市立車屋美術館） 12・06

地域の美術を見つめなおす　木村理恵子（栃木県立美術館） 13・06

山梨から関東諸国（?）美術館めぐり　平林 彰（山梨県立美術館） 14・06

地域に、あるいは、地域から目を注ぐことなど　鴨原悠（埼玉県立近代美術館） 15・06

繋がる、継承、美術への旅　末崎真澄（馬の博物館） 16・06

アートセンターと美術館、それぞれの役割とは　田中龍也（群馬県立近代美術館） 17・06

ポスト東日本大震災、新型コロナウイルス感染症時代の情報デザイン　橋本優子（宇都宮美術館） 18・12

コロナ禍の現場からみえてきたもの　アートの逞しさとしなやかさ　堀内重見（北鎌倉 葉祥明美術館） 19・06

「美連協」後の展覧会を考える―コロナ禍を乗り越えるために　井関 悠（水戸芸術館現代美術ギャラリー） 20・06

〈東京ブロック〉

町田からみた東京の美術館　滝沢恭司（町田市立国際版画美術館） 11・08

東京にて、美術展を眺めて　德山拓一（森美術館） 12・08

文化財を取り巻く〈デジタル技術の行方　杉浦 智（東京富士美術館） 13・08

インスタ映え、＃ MeToo、リーディング・ミューアム　成相 肇（東京ステーションギャラリー） 14・08

写真映像の展示を考える　田坂博子（東京都写真美術館） 15・08

浮世絵に関する展覧会の動向について　日野原健司（太田記念美術館） 16・08

美術館のコレクションと地域社会　関 直子（東京都現代美術館） 17・08

本江邦夫氏、表現の不自由展、新型コロナウイルス　五十嵐卓（SOMPO 美術館） 18・14

コロナ禍を共に生きる ― 東京都内の区立美術館　山田真規子（目黒区美術館） 19・08

3 度目の緊急事態宣言を受けて　島本英明（石橋財団アーティゾン美術館） 20・08

〈北信越ブロック〉

信州現代作家展巡りを中心に　木内真由美（長野県信濃美術館） 11・10

北陸新幹線と美術館　石堂裕昭（福井市美術館） 12・10

富山県美術館開館にあたり感じたこと　八木宏昌（富山県美術館） 13・10

北信越この 1 年　谷口 出（石川県立美術館） 14・10

節目の年の美術館　中川美彩緒（富山県水墨美術館） 15・10

芸術祭以降―美術館の空間を読み解く　荒井直美（新潟市美術館） 16・10

コレクションとその保全について　黒澤浩美（金沢 21 世紀美術館） 17・10

内外の関心が高まる北陸のガラス造形―富山市ガラス美術館を中心に―　畠山耕造（富山市ガラス美術館） 18・16

コロナ禍中での新潟県立美術館の対応　桐原 浩（新潟県立万代島美術館） 19・10

ささやかな会場造作の変化　家から風のイメージへ　野田訓生（福井県立美術館） 20・10

〈東海ブロック〉

“ 徳川の平和 ” がもたらした東海ブロックの展覧会　吉田恵理（静岡市美術館） 11・12

アートが社会の中で語りはじめる時　廣江泰孝（岐阜県美術館） 12・12

すべてのミュージアムの女 / 男たちに　原 舞子（三重県立美術館） 13・12

休館が続く中、際立つ企画展　高北幸矢（清須市はるひ美術館） 14・12

休館中の四方山話　北谷正雄（豊田市美術館） 15・12

閉館、休館はあるけれど　速水 豊（三重県立美術館） 16・12

表現をめぐる感情と距離　高見翔子（岡崎市美術博物館） 17・12

物情騒然とした社会と美術館界　木本文平（碧南市藤井達吉現代美術館） 18・18

コロナ禍における美術館　青山訓子（岐阜県美術館） 19・12

コロナ禍をチャンスとした館内人材の多様化を望む　村上 敬（静岡県立美術館） 20・12

〈近畿ブロック〉

誠実な姿勢で　渡辺亜由美（滋賀県立近代美術館） 11・12

調査と集積と　新谷式子（あべのハルカス美術館） 12・14

時代は確実に変わりつつある。　山野英嗣（和歌山県立近代美術館） 13・14

留め置けぬ芸術と共に　橋本 梓（国立国際美術館） 14・14

近代を見る眼　鈴木慈子（兵庫県立美術館） 15・14

二つのニュー・ウェイブ　中谷至宏（京都市美術館）　16・14
漂泊する美術館像　休館中の美術館活動から　荒井保洋（滋賀県立近代美術館）　17・14
「パンデミック・シティ」と美術館　中井康之（国立国際美術館）　18・20
コロナ禍の下で開催された展覧会　松川綾子（奈良県立美術館）　19・14
関西は展覧会が元気だ。　越智裕二郎（西宮市大谷記念美術館）　20・14

〈中国ブロック〉
それでも巡回展は中国地方を駆け巡る 古谷可由（ひろしま美術館）　11・16
鳥取県立美術館建設場所決定と地元に愛された作家たち　今 香（米子市美術館）　12・16
日記から―美術は楽しい　前田 興（倉敷市立美術館）　13・16
地域密着の企画展が盛ん　神 英雄（安来市加納美術館）　14・16
この地域のリニューアル情報のまとめ　谷藤史彦（ふくやま美術館）　15・16
ミュージアムを振り返りつつ考えること　赤井あずみ（鳥取県立博物館）　16・16
展覧会をふりかえる　廣瀬就久（岡山県立美術館）　17・16
「美作三湯芸術温度 2019」のイベントを終えて、そしてこれから　岸本和明（奈義町現代美術館）　18・22
コロナ禍における感染症防止対策についての報告―山口県立美術館「ハマスホイとデンマーク絵画」展の場合　河野通孝（山口県立美術館）　19・16
2020 年の雪舟顕彰　荏開津通彦（山口県立美術館）　20・16

〈四国ブロック〉
三越に関連したデザインのことなど　杉山はるか（愛媛県美術館）　11・18
コレクションと人　安達一樹（徳島県立近代美術館）　12・18
地域資源を魅力に！　四国アート事情あれこれ　菅 春二（新居浜市美術館）　13・18
四国の学芸員力を考える　川浪千鶴（元高知県立美術館）　14・18
分野横断の可能性　一柳友子（香川県立ミュージアム）　15・18
四国は一つ　江川佳秀（徳島県立近代美術館）　16・18
地域の美術館　高木貞重（町立久万美術館）　17・18
アートによる地域創生いろいろ　毛利直子（高松市美術館）　18・24
コロナ禍、休館から開館へ　竹崎瑞季（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館）　19・18
コロナ禍、続く模索と展開―展覧会とオンラインコンテンツ　長井 健（愛媛県美術館）　20・18

〈九州ブロック〉
つれづれに―先人を想う　岡しげみ（大分県立美術館）　11・20
連なりのうちに見えた熱さと苦さ　西本匡伸（福岡県立美術館）　12・20
地域力、美術館力　森山秀子（久留米市美術館）　13・20
コレクションを生かした展覧会作り　森園 敦（長崎県美術館）　14・20
古代から現代へ―多彩な美術展から　山西健夫（鹿児島市立美術館）　15・20
インバウンドとコレクション　ラワンチャイクン寿子（福岡アジア美術館）　16・20
福岡を中心に　令和最初の九州ブロック報告　魚里洋一（福岡県立美術館）　17・20
コミュニティの中の美術館として　鬼本佳代子（福岡市美術館）　18・26
コロナと水害、美術館と展覧会　林田龍太（熊本県立美術館）　19・20
コロナ禍のミュージアム　宗像晋作（大分県立美術館）　20・20

[部会報告]

号・頁

〈保存研究部会〉
根本亮子（岩手県立美術館）　11・22
根本亮子（岩手県立美術館）　13・22
相澤邦彦（兵庫県立美術館）　15・22
根本亮子（岩手県立美術館）　17・22
安藤里恵（碧南市藤井達吉現代美術館）　19・22

〈教育普及研究部会〉
遊免寛子（兵庫県立美術館）　11・23
清家三智（名古屋市美術館）　13・23
遊免寛子（兵庫県立美術館）　15・23
吉澤菜摘（国立新美術館）　17・23
中村貴絵（横須賀市美術館）　19・23

〈情報・資料研究部会〉
鴨木年泰（東京富士美術館）　11・24
鴨木年泰（東京富士美術館）　13・24
川口雅子（国立西洋美術館）　15・24
鴨木年泰（東京富士美術館）　17・24
川口雅子（国立西洋美術館）　19・24

〈小規模館研究部会〉
齋藤桃子（岩手県立石神の丘美術館）　11・25
三谷 渉（田辺市立美術館）　13・25
神谷剛生（刈谷市美術館）　15・25
山内宏泰（リアス・アーク美術館）　17・25
坂上義太郎（BB プラザ美術館）　19・24

〈ホームページ部会〉
宮武 弘（福島県立美術館）　11・26
宮武 弘（福島県立美術館）　13・26
宮武 弘（福島県立美術館）　15・26
平井章一（個人会員）　17・26

〈機関誌部会〉
尾崎信一郎（鳥取県立博物館）　11・27
尾崎信一郎（鳥取県立博物館）　13・27
尾崎信一郎（鳥取県立博物館）　15・27
尾崎信一郎（鳥取県立博物館）　17・27

〈美術館運営制度研究部会〉
貝塚 健（石橋財団ブリヂストン美術館）　11・28
貝塚 健（石橋財団ブリヂストン美術館）　13・28
貝塚 健（石橋財団ブリヂストン美術館）　15・28
安田篤生（奈良県立美術館）　17・28
安田篤生（奈良県立美術館）　19・25

〈地域美術研究部会〉
山田 諭（名古屋市美術館）　11・29
藤崎 綾（広島県立美術館）　13・29
藤崎 綾（広島県立美術館）　15・29
藤崎 綾（広島県立美術館）　17・29
藤崎 綾（広島県立美術館）　19・25

[新規会員館紹介]

号・頁

苫小牧市美術博物館　12・22
東根市公益文化施設　まなびあテラス　12・23
韮崎大村美術館　12・24
大田区立龍子記念館　12・25
郷さくら美術館　12・26
安曇野山岳美術館　12・27
（公財）水野美術館　12・28
熊本県立美術館　12・29
有島記念館　14・22
中札内美術村　14・23
喜多方市美術館　14・24
武蔵野市立吉祥寺美術館　14・25
豊川市桜ケ丘ミュージアム　14・26
北九州市漫画ミュージアム　14・27
国立アイヌ民族博物館設立準備室　16・22
太田市美術館・図書館　16・23
川口市立アートギャラリー・アトリア　16・24
清里フォトアートミュージアム　16・25
たましん歴史・美術館　16・26
上原美術館　16・27
絹谷幸二 天空美術館　16・28
奥田元宋・小由女美術館　16・29
弘前れんが倉庫美術館　18・28
さいたま市岩槻人形博物館　18・29
草間彌生美術館　18・30
安田侃彫刻美術館アルテピアッツァ美唄　20・22
栃木市立美術館　20・23
角川武蔵野ミュージアム　20・24
シルク博物館　20・25
東京オペラシティ アートギャラリー　20・26
ヨックモックミュージアム　20・27
サイトウミュージアム準備室　20・28
京都府京都文化博物館　20・29

[事務局から]

号・頁

防災のこと、東京オリンピック・パラリンピックのこと　前山裕司（企画担当幹事）　11・39
第 66 回総会について　前山裕司（企画担当幹事）　12・31
行動指針、災害対策委員会、メキシコ地震のこと　前山裕司（企画担当幹事）　13・31
第 67 回総会について　渋谷 拓（企画担当幹事）　14・29
著作権法改正、リーディング・ミュージアム、大規模災害　渋谷拓（企画担当幹事）　16・29
報告：第 68 回総会について　大越久子（企画担当幹事）　16・31
全国美術館会議の一般社団法人化に向けて― 特に正会員の定義について―　末武伸往（総務担当幹事）　17・31
あいちトリエンナーレ、台風 19 号による会員館の被災など　大越久子（企画担当幹事）　17・33
報告：令和 2 年度の総会について　大越久子（企画担当幹事）　18・32
新しい日常化における全国美術館会議のいろいろ　大越久子（企画担当幹事）　19・28
広報委員会設置と今後について　尾崎信一郎（広報担当）　19・29
法人化 2 年目の年に　山梨俊夫（事務局長）　20・35

[特別記事等]

号・頁

全美の昔　山梨俊夫（国立国際美術館・全国美術館会議副会長）　11・F-12
全国美術館会議会員館の皆様へのお願い　美術館の原則と美術館関係者の行動（第 9 草案）　山梨俊夫（美術館運営制度研究部会部会長）　11・30
会員の呼称について　12・33
「先進美術館」に端を発した議論と全国美術館会議声明　「美術館と美術市場をめぐる基本姿勢について」に関わる経過報告　渋谷 拓（企画担当幹事）　14・31
美術館と美術市場との関係について（声明）　建畠 晢（全国美術館会議会長）　14・32
法人としての再出発　建畠 晢（一般財団法人全国美術館会議会長）　18・01
一般社団法人全国美術館会議定款　18・02
広報委員会の発足について　冨田 章（理事）　19・27

全国美術館会議の活動は以下の賛助会員各社の支援を受けております。
会員各社のお名前を記して、心より感謝を申し上げます。

株式会社集英社

カトーレック株式会社　株式会社伏見工芸　ヤマト運輸株式会社

株式会社アート・ベンチャー・オフィス ショウ
イセ文化財団
株式会社NHKエデュケーショナル
株式会社NHKプロモーション
株式会社加島美術
協同組合美術商交友会
株式会社グッドフェローズ
株式会社クレヴィス
株式会社廣済堂
金剛株式会社
JOPD株式会社
進和テック株式会社
せとうち美術館ネットワーク
一般社団法人全国美術商連合会
公益財団法人ダイキン工業現代美術振興財団
大日本印刷株式会社
株式会社DNPアートコミュニケーションズ
株式会社東京美術倶楽部
凸版印刷株式会社
株式会社トップアート鎌倉
ピープルソフトウェア株式会社
株式会社美術出版社
有限会社丸栄堂
株式会社ユニークポジション
株式会社レンブラント
早稲田システム開発株式会社

アート印刷株式会社
イカリ消毒株式会社
M&Iアート株式会社
株式会社ギャルリーためなが
日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社
読売新聞東京本社
ライトアンドリヒト株式会社

有限会社アート・フリース（大阪美術）
株式会社アートローグ
影山　幸一
株式会社学研プラス
株式会社求龍堂
株式会社キュレイターズ
株式会社生活の友社
「美術の窓」「アートコレクターズ」
株式会社丹青研究所
株式会社TTトレーディング
トライベクトル株式会社
美術年鑑社　新美術新聞

法人化2年目の年に

事務局長　山梨俊夫（やまなし としお）

昨年の4月に全国美術館会議（以下、全美）が任意団体から一般社団法人になって、今年で2年目を迎えた。この1年余りの間、昨年秋には事務所を独立して構えるなど新たな体制に伴う手続きに追われていた。その一方で新型コロナウイルスの感染拡大の影響によって変則的な第1回社団法人の社員総会を行ったのに続いて、本年も予定していた総会は開けず、以下のような変則の形態をとらざるを得なかった。そうして出発した一般社団法人全国美術館会議が6月4日に2度目の総会を迎えた。

いまだコロナ禍が続く状況下で、2年続けて京都での総会が開けず、やむなく事務局に近い私学会館アルカディア市ヶ谷を借り、6月4日の午前中に理事会、午後に総会を開いた。ただ昨年度とは異なって今年度の理事会総会には、東京近辺在住の理事数名にリアルの参加をいただき、総会はリモートで全国に配信できる体制を整えることができた。しかし、どなたが受信しているのかはわからず、また質問を受けるところまでは技術的に無理であったため、リモートの限界を痛感させられることになった。参加者の顔が見えないもどかしさを抱えながらも、リモートで参加された会員は延べ341名にのぼった。

総会の議長は、「社員総会開催地において、運営の中心となる正会員が務め、これにあたる」と定款に記されてあるため、東京ステーションギャラリー館長の冨田章理事にお願いし、冨田氏の手際よい進行で無事すべての議案決議・各種報告が円滑に可決された。あらかじめ送付した議決権行使書と総会議案書をもって、内容の了解の上で賛否の意思表示をした行使書を返送してもらい、提出された311通によりすべての議案についての賛同を得た。議案は例年どおりの項目のほか、定款の一部変更があり、「第1章　総則」の「（入会）第6条の2」の条文に「賛助会員になろうとする団体は、正会員が保有するまたは代表する美術館施設に所属する者1名の推薦を必要とする。」との一文が追加された。これによって今後は賛助会員についても、従来とは異なり、全美内からの推薦が不可欠になったので留意していただきたい。

役員交代に関しては、5名の辞任があり、前からの欠員を補うためもあり、10名が新たに理事に就任した。辞任理事は馬渕明子氏（前国立西洋美術館長）、内田洋子氏（前原美術館長）、村田眞宏氏（前豊田市美術館長）、西村勇晴氏（前北九州市立美術館長）、山梨俊夫（前国立国際美術館長、兼任の副会長も辞任）。新任は鷲田めるろ氏（十和田市現代美術館長）、佐々木吉晴氏（宇都宮美術館長）、逢坂恵理子氏（国立新美術館長）、片岡真実氏（森美術館長）、青柳正規氏（石川県立美術館長）、坪井則子氏（佐野美術館長）、速水豊氏（三重県立美術館長）、島敦彦氏（国立国際美術館長）、小坂智子氏（長崎県美術館長）、菅章氏（大分市美術館長）で、1名欠員であった監事には木本文平氏（碧南市藤井達吉現代美術館長）が選任された。なお、副会長には国立館から逢坂新理事、公立館から出川哲朗理事（大阪市立東洋陶磁美術館長）が就任した。

さらに理事の交代に伴って、企画委員会の委員も代わり、保存研究部会長に木本文平新監事、美術館運営制度研究部会長に浅野秀剛理事（大和文華館長）が就任した。また、災害対策委員長に佐々木新理事が、新設された広報委員長には冨田理事が就任した。以上が人事関係であるが、今年度は、辞任や欠員の補充などで例年よりも変動がずっと大きかったことが特筆される。

来年の総会は、再々度になる京都を断念し、建畠哲会長を中心に東日本地区での開催を模索したところ、青柳新理事が館長を務める山梨県立美術館が快く引き受けてくださったので、令和4年6月2日、3日に甲府市で行う予定になった。今回の総会後の特別行事として、当初総会を予定していた京都市京セラ美術館長の建築家青木淳氏に講演をお願いし、ご自身が設計された同美術館の改築改修の構想を多くの映像を交えながらお話しいただいた。

最後に現在全美が抱えているいくつかの課題に触れておく。昨年度末に予算化された第3次補正予算によるコロナ禍のもとでの芸術活動支援事業「ARTS for the future！事業」への支援申請を促すよう、文化庁の担当の方を呼んで国立新美術館で説明会を開き、申請のひな型を作成しできるだけ広く正会員に支援獲得を呼びかけた。第1次募集に応じたのが5,369件（美術に限らず芸術活動全般）で現在審査が進んでおり正会員のなかでも、申請し無事採決された2、3の館からその旨の報告をいただいている。

また、文化庁の文化審議会内では現状に合わせた博物館法の改正が論議されており、全美からは、博物館部会のメンバーに逢坂恵理子氏、出光美術館長の出光佐千子氏、その下部組織のワーキング・グループには、ちひろ美術館・東京の竹迫祐子氏が加わっているが、文化庁に要望して、ワーキングのオブザーバーに3名、また8月5日に行われたヒアリングに全美としての意見を発言するために、3名に加えてさらに2名、公立、私立美術館の計5名にヒアリング対象者となっていただいている。博物館法改正の実際がまとめられるのはまだ時間がかかると思われるが、ヒアリングは8月に2度にわたって行われた。全美内では有志がこの件に関して勉強会を開く予定でいるので、関心のある方はぜひそれにも留意していただきたい。

またさらに、アーツ前橋の寄託作品の紛失とその後の対処に関する問題が、美術評論家連盟も絡んで最近改めてメディアに取り上げられている。この件は、すべての美術館に起こりうる問題でもあるので、作品の管理だけでなく、美術館関係者全員にかかわる人間関係も含んで、美術館の日々の活動と連動するから、改めて全美が刊行した小冊子「美術館の原則と美術館関係者の行動指針」を読むことをお勧めしたい。

末尾に、全美事務局では、ここ数年事務局長が不在であったが、法人化に伴って事務局が独立し、事務局長を設ける必要が出てきたために、6月4日の理事会の場で建畠会長から提案があり理事会で認められた結果、小生山梨俊夫が事務局長に就任したことを付記しておきたい。上述のような諸事、全美体制の整備など、やるべきことは多いと改めて実感しているが、及ばずながら非力を絞る所存であることを控えめに表明してこの稿を終わりたい。以上、あいさつを兼ねて、報告を記しておく。

編集後記

『ZENBI』の20号をお届けする。年に2回の発行であるから、今回で創刊から10年が経過したこととなる。長きにわたって順調に発行を続けることができたことは毎号快く原稿をお寄せいただいた寄稿者の皆様のおかげであり、加盟館と事務局の一貫した支持があったからである。この場を借りて深く感謝を申し上げる。バックナンバーを繰るならば美術品補償制度に始まり、「美術館の原則と美術館関係者の行動指針」の制定、ICOM京都大会2019の開催、著作権法や博物館法の改正、震災や水害といった度重なる自然災害への対応と全国美術館会議がこの10年間に直面してきた様々な問題が浮かび上がる。本誌が日本の美術館をめぐる激動の時代のドキュメントとして一定の役割を果たせたことを証明しているだろう。

そして現在私たちが直面する最大の危機は新型コロナウイルス感染症をめぐるそれであり、まだ光明からはほど遠い。全国美術館会議の総会も2年続けて対面形式が見送られたことについては事務局からの報告にあるとおりだ。多くの展覧会が規模の縮小や会期の短縮を余儀なくされ、展覧会に通うことすら困難となっている。かくいう私も日本でも感染者が少ない県に居住しているため、この1年の間、作品の集荷や返納以外に非常事態宣言発出地域をはじめとする大都市圏への出張を禁じられ、多くの重要な展覧会を見る機会を逸した。このような不自由は今号のブロック報告にも認められ、いくつかの報告は地域の総括というよりも所属館の事例報告、あるいは地域と特段関係のない話題について論じている。厳密には各ブロックの美術状況や展覧会の報告とはいえないかもしれないが、これもまた地域間の移動が制限されたこの半年の状況の反映であると考え、特に加筆や修正を求めず掲載している点をお断りしておく。それにしてもこのような状況はいつまで続くのか。私たちには逢坂氏の記事にある「アフターコロナ」の美術館像を早急に構築することが求められている。

最後に、お気づきいただけただろうか、本誌に挿入される図版が19号よりカラーとなっている。印刷をお願いしている日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社の御尽力によるものである。感謝を申し上げる。 (O)

『ZENBI』では、次の要領で広く
皆さんからの原稿をお待ちしています。

［原稿の内容］
・展覧会、普及活動など美術館の活動に対する批評を受けつけます。
・原則として具体的に対象を限定した批評をお寄せください。
・原稿には表題を付してください。

［投稿の資格］
・全国美術館会議正会員の職員であればどなたでも投稿できます。
・匿名の投稿は受けつけません。

［投稿に係る詳細］
・原稿の形式、許諾、著作権等については投稿規定を参照ください。

［締切］
・第 21 号（2022 年 1 月発行予定）については 10 月 31 日、
第 22 号（2022 年 7 月発行予定）に関しては 4 月 30 日を締切とします。（当日必着）

［提出先］
s-osaki@pref.tottori.lg.jp（尾﨑）
aoyama_k@nmao.go.jp（青山）

［問い合わせ先］
内容に関する問い合わせについては下記まで御連絡ください。
〒680-0011 鳥取市東町 2-124　鳥取県立博物館内
（一社）全国美術館会議広報委員 尾﨑信一郎
s-osaki@pref.tottori.lg.jp　TEL 0857-26-8042

ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定

1. 全般事項
(1) 本誌への投稿者は原則として全国美術館会議正会員の職員に限る。
(2) 投稿原稿は他誌（電子媒体を含む）に発表されてないものに限る。
(3) 原稿（写真を含む）は原則としてメールで提出すること。
(4) 原稿は原則として 2,000 字程度とする。

2. 投稿文の採否
(1) 投稿文の採否、掲載順などは（一社）全国美術館会議広報委員会（以下「広報委員会」という。）に一任とする。
(2) 掲載が決定した場合は、その旨を投稿者に通知する。

3. 原稿について
(1) 原稿は原則として常用漢字を用いることとし、である調とすること。
(2) 引用した文献は、本文中において該当箇所の右肩に順次番号をつけ、その番号を引用順に列挙すること。
(3) 個人を同定しうる顔写真等を掲載する場合は、本人等の承諾を必ず得ること。
(4) 投稿文にはできる限り画像の掲載をお願いするが、著作権許諾及び著作権料の支払いがが必要な場合は投稿者が責任を持って処理すること。

4. 校正について
校正については、初校をもって著者校正とする。その後は広報委員会の責任とする。

5. 著作権について
(1) 本誌に掲載された投稿文の著作権は（一社）全国美術館会議に帰属するものとする。
(2) 掲載後の投稿文について著者自身が活用するのは自由とする。ただし、出典（掲載誌名、巻号ページ、出版年）を記載するのが望ましい。

6. その他
(1) 原稿料は支払わない。
(2) 掲載投稿一編につき、本誌 5 部を進呈する。

美術の窓
THE WINDOW OF ARTS

旬のアートを追い続ける「美術の窓」は、人気作家が自作の秘密を明かす技法講座に加え、国立新美術館と東京都美術館における毎月の公募展レビューや、豪華執筆陣による連載も充実。他にも展覧会プレビューや月間の展覧会スケジュールなど毎月盛りだくさんにアートの情報をお届けします。定期購読なら、1冊あたりの価格がお得になります。［判型：B5判］

定期購読のご案内

＼来館者も利用できる／
資料室や図書室への
蔵書もオススメです！

・**送料無料**で毎月発売日にお届けします。
・2年間以上のお申し込みは購読料がより**お得に！**
※1冊定価1,676円（税込）

ご契約いただいた場合、最新号1冊をプレゼント。
詳細はお電話またはメールにてお問い合わせください。
※「ZENBIを見た」とお申し出ください。

【美術の窓セット】

1年（12冊）	19,800円	312円お得！
2年（24冊）	35,000円	5,224円お得！
3年（36冊）	51,800円	8,536円お得！

【美術の窓＋美術界データブックセット】

1年（12冊）＋データブック1冊（800円）	20,600円
2年（24冊）＋データブック2冊（800円×2）	36,600円
3年（36冊）＋データブック3冊（800円×3）	54,200円

※美術界データブックは定価1,676円（税込）です

※弊社オンラインショップからもお申し込みいただけます。備考欄に「ZENBIを見た」とご記入ください。
※購読開始号をお届けの際に、専用のお振込用紙を同封いたします。郵便局の場合、綴込のお振込用紙もご利用いただけます。

定期購読のお問い合わせ・お申し込み先

株式会社 生活の友社　〒104-0061 東京都中央区銀座1-13-12　銀友ビル4F
TEL.03-3564-6900　FAX.03-3564-6901
E-mail: shop@tomosha.co.jp
ホームページ　https://www.tomosha.com

オンラインショップ

NISSHA

EMPOWERING YOUR VISION

美術品管理システム Artize MA

NISSHA独自のアーカイブ構築ノウハウから生まれた
収蔵作品（資料）管理のための高機能データベース

「Artize MA（アルタイズ・エム・エー）」は、NISSHA の高級美術印刷への豊富な取り組み経験やデジタルアーカイブ構築ノウハウから生まれた「収蔵作品管理」「収蔵資料管理」のための高機能データベースシステムです。

日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社
http://artize.nissha-comms.co.jp/

担当：石濵・相笠　〒604-8551 京都市中京区壬生花井町 3　075(823)5151

美術商

丸栄堂

日本画・洋画・工芸

代表取締役 浅木正勝

〒101-0021　東京都千代田区外神田 5-4-8
TEL. 03-3831-7821　FAX. 03-3831-7771
http://www.marueido.com

IPMを取り入れた保存環境づくりと
虫・カビの防除で文化財を守りましょう。

調査・診断
▼博物館・美術館・図書館・寺社等の環境調査
▼調査セットによる環境調査
▼昆虫や微生物の同定
▼生物の被害調査・診断

資格・認定
▼文化財虫菌害防除作業主任者
▼文化財IPMコーディネータ
▼文化財虫菌害防除薬剤等認定

コンサルティング
▼保存環境・防除薬剤

防除処置
▼殺虫・殺菌処理の受託
▼燻蒸効果判定

研修・普及
▼文化財の保存に関する研修会・講習会
▼図書の出版

公益財団法人 文化財虫菌害研究所
〒160-0022　東京都新宿区新宿二丁目1番8号 新宿フロントビル6F
TEL　03（3355）8355　FAX　03（3355）8356　www.bunchuken.or.jp

LC ecosys Life Creation Life Cycle Assessment Ecological System

文化財と人と環境を第一に。

文化財保存分野に参入してから40余年、守り続けたものがある。

長年の経験と実績により、博物館・美術館等それぞれの施設環境に
合わせた文化財IPM（総合的有害生物管理）プランをご提案いたします。

調査・診断
現状調査・診断／設計
原因究明・検査／分析

防除・メンテナンス
モニタリング
殺虫／殺カビ
IPM メンテナンス

その他サポート
教育研修支援
IPM 構築支援
関連商品販売

環境エンジニアリング　全国100事業所
IKARI イカリ消毒株式会社　https://www.ikari.co.jp

本　社　｜〒151-0051　東京都渋谷区千駄ヶ谷5-27-11　TEL. 03-3356-6191　FAX. 03-3350-1405
大阪オフィス｜〒542-0076　大阪府大阪市中央区難波5-1-60　TEL. 06-6636-2741　FAX. 06-6636-2720

2020年3月にオープンした神楽坂の新たなアートギャラリー√K Contemporaryは、
戦後から現代、そして未来を担う若手まで幅広いアーティストをご紹介していきます。
これからのアートシーンを創造していく、まさに次世代型アートギャラリーです。

Exhibition Schedule 2021

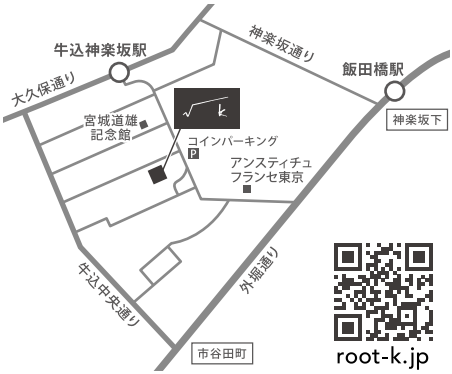
岸裕真 個展 Yuma Kishi Solo Exhibition Curation by Shintaro Sumimoto

2021年10月17日(日)〜11月7日(日) プレビュー 10月16日(土) 15時〜20時予定

人工知能(AI)を用いた作品を制作する岸裕真の個展を開催いたします。
岸裕真は東京大学大学院工学系研究科在学中からAI(人工知能)の中でも視覚やイメージに関連する研究を行い、現在は東京藝術大学先端芸術表現科修士課程に在籍。AI(Artificial Intelligence)を「Alien Intelligence」(異質な知性)としてとらえる作品は、どんな未知の可能性をみせてくれるのか、ぜひご覧ください。

アーティストHP https://obake2ai.com/work

＊新型コロナ感染拡大状況によりスケジュールが変更する可能性がございます。
最新情報は当ギャラリーホームページまたはSNSにてご確認ください。



root-k.jp

@rootkcontemporary
@rk_contemporary
@rk_contemporary

〒162-0836
東京都新宿区南町6
Tel:03-6280-8808
Fax:03-6280-8809
Email:info@root-k.jp

11:00-19:00
休廊:日・月・祝
＊会期中は祝日も営業

√K Contemporary

「牛込神楽坂駅」都営地下鉄大江戸線 A2出口 徒歩5分/「飯田橋駅」東京メトロ B3出口、JR 西口 徒歩10分/「神楽坂駅」東京メトロ東西線 神楽坂口 徒歩12分